幼児の教育　昭和61年2月1日発行(毎月1回1日発行)昭和23年4月15日第三種郵便物認可　第85巻　第2号

幼児の教育 2 1986

家庭・保育所・幼稚園

昭和 61.2.7 受贈 幼稚園教育

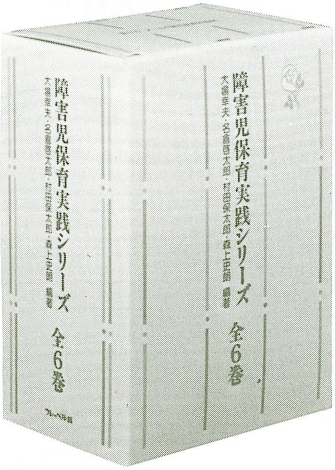
第 85 巻　第 2 号　日本幼稚園協会

新刊!!

障害児保育実践シリーズ

大場幸夫・名倉啓太郎・村田保太郎・森上史朗　編著

《全6巻》



- 第1巻　自閉的な子どもと保育
- 第2巻　発達に遅れのある子どもと保育
- 第3巻　ことば・聞こえ・見ることの障害と保育
- 第4巻　病虚弱・肢体不自由の子どもと保育
- 第5巻　心に問題をもつ子どもと保育
- 第6巻　障害児保育の基礎

障害をもつ子の保育に心要な配慮はなにか？

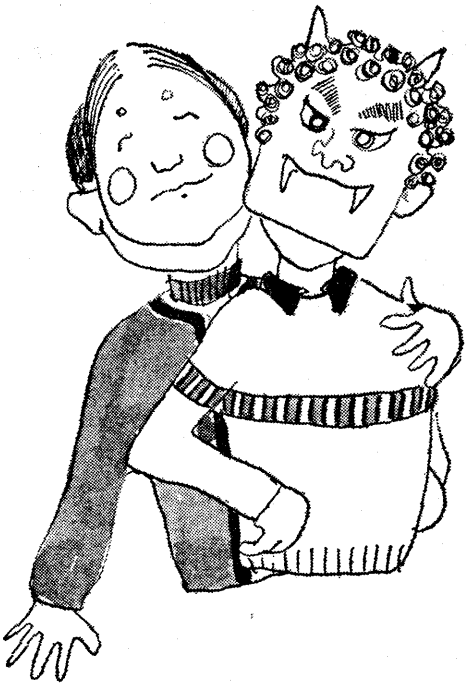
♣いま、保育現場では、望ましい障害児保育について真剣に模索されています。
♣症状も程度も多岐にわたる障害児の姿を十分把握し、一人ひとりの個性を見きわめて保育することが大切です。
♣このシリーズでは、実際例をたくさん出しあって、なにをどのように指導したらよいか、具体的に考えていきます。
♣また、実践者との座談会を随所にとり入れ、現場のナマの声を通して保育者にとって必要な問題点を探っていきます。
♣たんなる理論書や研究書ではなく、保育現場に生かされることを目的とした実践指導書です。
♣豊富な事例、適切な助言、イラストも多く読みやすいこのシリーズは、きっとお役に立ちます。

A５判・セットケース入り・各巻平均264頁・セット定価10,800円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育



第八十五巻　　第二号

幼児の教育　目次

——第八十五巻　二月号——

パッションとドポス……河邊　杲(4)

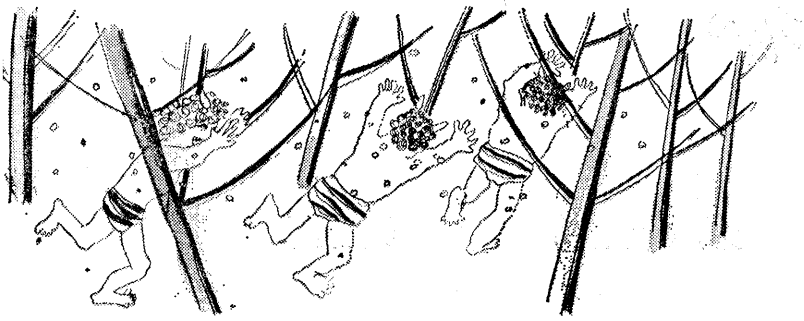
保育の実践と理論を求めて……津守　真(7)

SF的読み解き　子どもという風景

第十一回　ウォッチング……堀内　守(17)

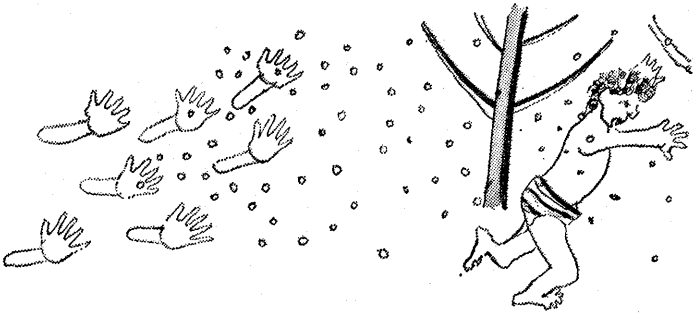
雪ん子たちの冬……水野　恭子(27)

© 1986
日本幼稚園協会



幼年時代の演劇体験……冨田　博之(34)
子どもたちのこと……大橋利恵子(40)
やけど……中谷喜久子(43)
兎園随筆⑱
痛いの痛いのとんでいけ……蕪木　寿江(50)
若いお母さんたちへ……榎田二三子(58)

カット福田理恵



パッションとトポス

河邊　杲

幼児三人が黙々とスコップで砂を盛りあげている。ひとりの子どもがスコップを手離したかと思うと素手でトントンと盛り砂を叩く。小さな手型がついたかと思うとまたその上から砂が盛られ、小さな両手の上に砂がふりかかるが叩く手を休めない。そこに先生が来られる。「あら、山つくっているの。……Mちゃんはどうして叩いているの？」「あのね、だって固くしないと崩れるから……くじらのように大きい大きい山にするの。」「あっそう、ちょっとみんな、Mちゃんは山がくずれないように手を叩くのだって……」

先生には小さな手で叩いている動きが目についてその意味が知りたかったのだろうか。

山をつくっているのだと見てきっと砂山が崩れないように叩いているのでは……と自分で思ったことを一度、確めて見たかったのだろうか。山だと見え来てわかって終うと叩いていることにのみ目が奪われて終い、くじらのような大きな山を作りたいと言う力強い心の叫び声がきこえてこなかったのではと思う。

保育者が子どもひとりひとりのどんな小さな動きをも、見逃さずありのままを肯定してかかわろう

とされる姿に将来を期待する反面、「行為の理由づけ」に忠実になる前に、子どもの大きな山にしたいというパッション（情念）に耳を傾けることができたら、きっと山づくりに一層のはずみがついただろうと思う。

保育の中で意識にかかわることはしても、心の深層に耳を傾けることにはどうも弱いのではなかろうか。

× × ×

大きな砂山ができた。残そうか。残して置いても誰かが来て崩して終うかも知れない。

だれかが放送してみんなに言えばよいという。放送という言葉に触発されてアメリカへも、アフリカへもかと急に話が飛躍的に広がる。砂をほうりあげながらの会話に魅了される。結局、リーダー的な児が頂上の砂をすくいとったはずみに、どっと倒れかかるように砂を崩しにかかる。殆んど崩れた時Y児が「おい迷路の城をつくろう」といって小さなスコップで溝のようなものを掘っていく。そこへ先生が来られて「さあ、みんなかたづけにしましょう」と告げられる。一目散に手洗い場に駈けて行く子、砂場から離れにくそうにスコップで砂をつつきながら立ち去る子。様々だがみんな立去ったあとにY君と先生が残る。先生は日頃からY君のことがわかっているかのように「クラスで待っているから、あとたのんだよ」と言って行って終われた。ひとりになったY児に私は即座につきあってみたくなった。（保育者と了解をとっていなかったことに対する逡巡もあったが……）きっと側に居るだけでもよい。そして鑑賞させてもらうだけでもよいと思った。ゴールができた時止めるかも知れない

とも考えた。やっとゴールができ「ここがゴール。ここにお城があるの」と小さなこぶのような形をつくり指で穴をあけた。もう止めるかと思ったとたん、私に向って「この城の中どうなっているかわかる？」と尋ねて来た。「さあどうなっているかな」と応えると「わからないだろう。むつかしいぞ」と言って今度は小さな指先を動かしながら「ここを通って行くの。ここにあり地獄があって危険なの。落ちないように通るの。そしてここが終点。」と道のような筋を引いて行く。「危険なところがあってむつかしいのだね」と共鳴すると「うん、もう一度スタートから迷路を行こう」と小石を持って迷路をたどり城まで来た時、急に「さあ帰ろう」と立ちあがり、「おじさん明日も来る？」と聞いて来た。……私自身いつの間にか一緒になって危険な迷路をさまよいあるいたような気持ちになっていた。

迷路の城の象徴するものについてはいろいろ仮定することはできるが、わからなくても側で鑑賞するだけでよいと思う。一緒に子どもの話の中の人物になって、そのものと二人で共有できれば二人で共鳴しながら了解しあうこともでき、そうした関係の中で自然に子どもは真の自己を語るようになる。同時に安定もする。保育の中で私たち保育者に理解しにくいことを見せつけたり、またくりかえし同じことを続けるような場合「どうしてこんなこと…」をと思う時こそ、子どもの心層にふれることのできるトポス（場）だと心得るべきだと思う。また保育で最も心すべきことは保育者にとってわけのわからないところに子どもたちのパッションを感じとることではなかろうか。

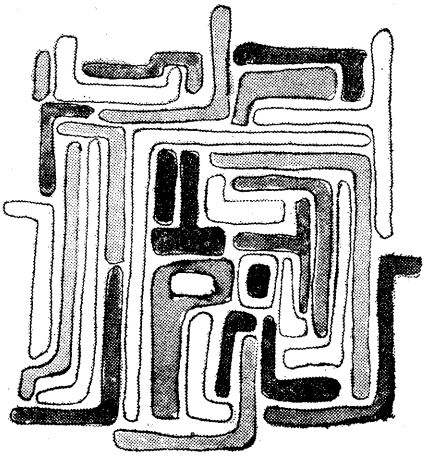
あと二ヵ月で保育者の側の保育の節目をむかえられるのだが、子どもたちの成長の節目は常にいたるところにあることを忘れないようにしたい。

（洗足学園短期大学）

保育の実践と理論を求めて

――中国の旅――

津守　真



発達診断について

中華人民共和国、遼寧省、瀋陽市にある中国医科大学より、私は講演の招請を受けた。私の著書、乳幼児精神発達診断法（大日本図書、昭和三十六年刊行）に、小児科医が関心をもったためである。私はその後の私の著書を送り、私の学問的立場を記し、それらを含めて話すことを許されるならば承諾する旨を返答した。講演の内容は私の自由であることが更に確かめられたので、十月上旬に中国に旅行することとなった。私は、講演題を、「発達の理解――科学的児童研究と人間学的児童研究の合点に立つ乳幼児精神発達診断法によって――」とした。

昭和三十年代に、乳幼児精神発達診断法を著したとき、私は二つのことを考えていた。その第一は、発達診断は、人為的に構成された検査場面ではなく、日常生活の中で観察されることを資料としてなされうるのではないかということであった。日常の保育の中で子どもが示す行動には、子どもの発達の最も本質的なことがあらわれているはずで、そのことに気がつけば、それは保育の

実践にも役立つという考えが根底にあった。

第二には、私は、お茶の水女子大学附属幼稚園で、幼児が一日中遊ぶ姿に魅せられており、それを簡潔に、客観的に示すことができないかを考えていた。子どもが十分に自己実現したときにあらわれる行動を明瞭にしたいと思った。このことは0～3歳の乳幼児について同様であるが、とくに、3～7歳の続編（大日本図書、昭和四十年刊行）に私は示した。

この私の意図は、ある点で成功したが、別の点で失敗をした。保育によって子どもが十分に生きることができたときの行動が、年齢的に、発達的に順序づけられることを示した点では成功と言ってよいだろう。また、一般に、子どもが共通にたどる発達の筋道を、具体的に認識することを可能にしたと言ってよいと思う。しかし、それが保育の実践にどのように生かされるかという点になると、疑念が生じる。それが何処に由来するかというと、根本的には、子どもの行動を子どもの世界の表現と見ることをせず、子どもから切り離して客観的行動の断片とした点にある。保育においては、保育者は子どもの行動の表面を見るのではなく、その行動をしている子どもの心の世界に、大人も自身の心の世界をもって応答する。あらわれた行動を生活全体から切り離して問題にしたのでは、それをどんなに科学的に精確に操作しても、保育の実践とは直接的関係はない。

更にまた、発達診断法は、年齢を規準として数量的に整理してあるので、それを個人に適用する場合、一方には、個人の発達の状態の相対的認識を可能にするが、他方には、個人を価値的に評価し、序列化する危険がある。ことに日本では、個人の能力の競争原理の教育が背景にあるので、これが個人の優劣の評価に使われる危険が生じた。これは、本来、この診断法の意図するところではない。

本来の意図とは違うことに利用されるに至るのは、科学的研究に共通の問題なのではないか。

保育や教育のように、人間が人間に直接にかかわる分野では、自然科学的な研究法や知識とは異る考え方を必

要とする。大人が子どもの生活の外に立って、子どもを対象化して操作し、支配するのではなく、生活を共にする中で相互に理解する研究法が考えられねばならない。すなわち、人間科学的、あるいは人間的研究であり、保育においては、実践と切り離しがたく表裏をなす。保育の実践は、人類の歴史と同じだけ古くからあるのだが、その人間科学的研究は、現代にとくに必要とされている、新しい課題である。

さて、私の乳幼児精神発達診断法は、研究の手続きにおいては、科学的児童研究の方法に従っており、そこで用いられた資料は、大人が子どもの生活に参与することによって生み出された日常的行動である。欠点と危険性をはらみながら、科学的児童研究と人間学的児童研究の合点に立つものと性格づけてよいかと思う。

私共は、具体的にひとりの子どもと生活を共にするとき、他の子どもと共通の発達の道筋が、その子どもに独自の個性的な仕方で生きられていることを発見する。そこで、発達の途上にあらわれる共通の行動（行動項目）のひとつひとつを、いろいろの子どもの具体例について考察することは、発達の理解を一層深めることになり、また、保育の実際にも役立つ知識となるであろう。いまここで、具体的行動に立ち入ることはできないが、私は以上のような考えのもとに、この講演で、発達の問題に新たに立ち向うことにした。

北京の空港で、中国医科大学の郑先生に迎えられ、中国航空に乗り換えて、瀋陽（シェンヤン）まで、約五十分である。はじめて通る夜の街並みは、自転車と人間がまばらに通るだけで、静かである。中心街に近い両側の煉瓦造りのビルは、昭和の初め頃を思い出させる。昔、奉天と呼ばれた時代に建てられた遼寧賓館は、重厚な大理石の床に金色の欄干の回り階段のある古典的なホテルである。夜中に、汽車の汽笛が聞える。ホテルの前は人民広場になっており、毛沢東の巨大な銅像が立っている。

翌日から、朝八時半より夕方四時半まで、二日間にわ

たって講義をすることになった。七、八十名の小児科医が聴衆である。医師であるけれども、だれもが謙虚で、親しみ深い。中国には、心理学者が極めて少ないようで、基礎児科と呼ばれる小児科部門が、乳児期のみならず、幼稚園から小中高校に至る身心両面にわたる児童の諸問題を扱っているようであった。私が個人的に話した何人もの医師たちが、医学は検査と投薬で終るのではなく、人間の問題なので、自分たちは心理学に関心をもつのだと語った。

私は自分の考えを率直に述べた。発達診断が個々の子どもの序列化に誤用されるのではないかということについて、何人もの人がそのように用いられることは反対であるが、ここではそのような心配は少ないのではないかと言われた。日本のような個人の能力の競争原理の教育ではなく、平等の原理に立った教育だからという趣旨のようである。短期間の滞在であるけれども、私も、子どもがおかれている状況が日本と中国では違うのではなかろうかと思うようになった。私の見るところでは、中国の子どもたちはのびやかで明るい。空港でも街でも、子どもに対して大きな声で叱るのを聞いたことがない。西洋の空港で見るような、シーと子どもを制止する光景も見たことがない。私の案内をつとめて下さった医師たちにそのことを話すと、その人たちは同意を示した。中国には子どもは眼のひとみであるということわざがあり、大人は子どもを大切にするのだと話してくれた。

講義のあとの質問時間に、すぐに手が上らない点では、中国の人たちは西欧人よりも日本人に似ている。それでも回を重ねるにつれて、質問が紙に書かれて私の手もとにくるようになった。早教育をどう考えるかという質問がいくつもあった。中国では一人子政策がとられている。一人の子どもに対してできるだけのことをしようという考えがある。私はそれに対して、早教育には二種類あることを述べた。第一は、ある特定の能力だけに着目して訓練をする早教育であり、第二は、大人と子どもの相互性の中で生活全体を育てる意味での早教育である。前者は私は反対であるが、後者の意味での早教育は

必要である。それは早教育というよりも、むしろ保育(care and education)であって、それは生れたときからすでにある。

小児科医の馬先生が、流暢な日本語で通訳して下さり、「先生はこの地に文化をもたらして下さいました」と結語を述べられたことは、私の最も嬉しいことであった。

中国医科大学附属幼児園

二日間の講義を終えて、三日目に附属幼稚園を訪問した。前晩に私を雑技(リーチ、曲芸や手品のショー)に案内してくれた女医さんが、幼稚園の子どもたちが私を楽しみにしていますと言っていたが、皆が私を待ち受けている様子だった。生後三ヵ月から入園することができる。

二、三歳の子どもの部屋には、三つの机をそれぞれ六、七人の子どもがとりかこみ、各机に異った種類のブロックが出してある。子どもたちはめいめい、自分の思うようなものを作っている。ふと気がつくと、ひとりの男の子は、ブロックを高くつなげて、その先端を私の方に伸ばしている。(写真1)私に向けている関心がそのような作品になっていることが分ったので、私も坐りこ

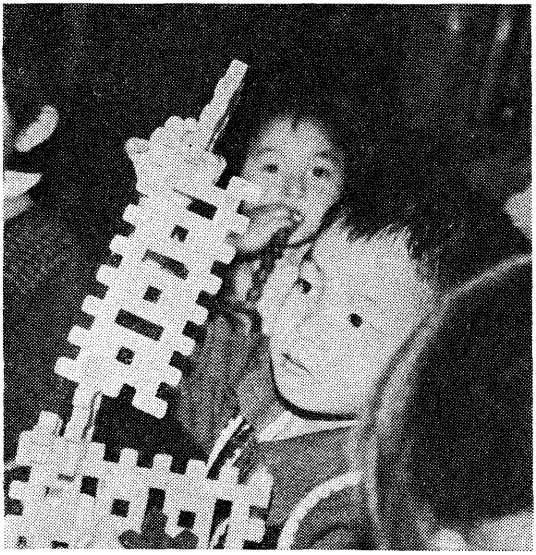


写真1

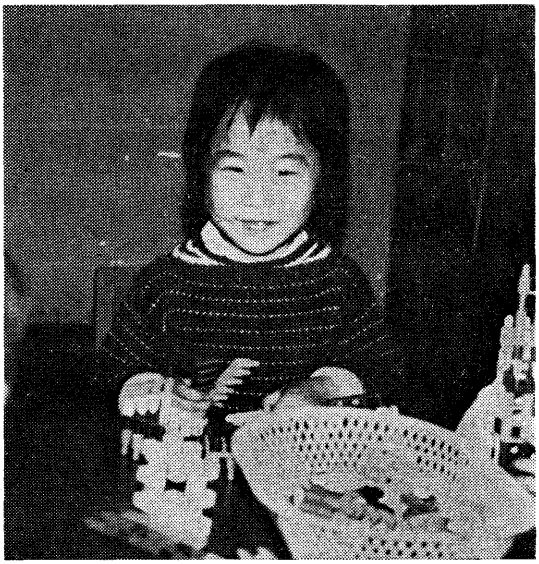


写真2

ンで相手をすることになった。しばらくすると、先生が私の肩を叩いて、後の女の子が私に何か差し出していることを知らせてくれた。ふり向くと、にっこり笑ってブロックを渡してくれた。（写真2）皆が活潑に何かを作っている中で、私も楽しんで時を過した。

四、五歳の部屋では、病院ごっこをしている。（写真

写真3

3）診察室、薬局、受付、レントゲン室、待合室、売店など、いくつかのコーナーが作ってあり、二、三人から数人ずつ子どもがいる。私はここで主賓の役を演じなければと思い、上衣を脱いでお医者さんの聴診器の前に坐った。すると、最初に受付け（挂号処）（写真4）にいって受診票をもらうのだという。診察を終るとレントゲン室にゆく。本物のレントゲン写真が吊り下げてある。薬局（葯局）で薬をもらう。帰りに売店で果物を買うとき、私はお金をもっていないので、クラスの先生が大急ぎで紙のお金を探して私にもってきてくれる。先生が遊んでいるのか、子どもが遊んでいるのか分らないくらいの大騒ぎである。この病院ごっこも、私を待機していてはじまったらしい。特別の訪問客の日の賑やかな遊びを、私も一緒に楽しんだ。

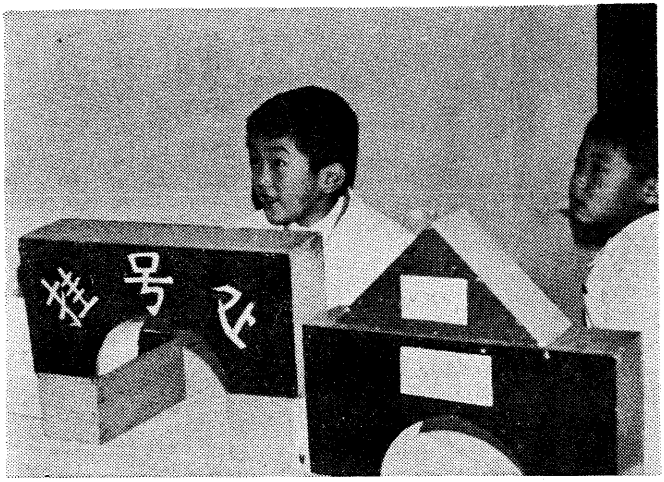


写真4

給食調理室には、丁度、昼食のための蒸しパン、揚げドーナツ、レバー、鳥などがゆで上って準備の最中だった。若い男女の調理師が、一種類ずつ全部を私に食べさせるのに子どものように大はしゃぎで、私はこの日は昼食を食べられないくらいだった。

六、七歳の部屋は、全部で六つの大きな机で、自由画、粘土、貼絵などをしていた。机ごとに材料はきまっ

ているが、何を作るかは子どもに任されている。小学校に学齢の子どもが入りきれないので、一年生は幼稚園にいるのだとのことであった。机ごとに分れてそれぞれが活動しているところは、黒板に向って一斉に授業をしている日本の小学校一年生よりも、偶然の事情とはいえ、充実した活動をしているように思えた。

最後に、遊戯室で、一クラスの子どもたちが集まり、五、六人の子どもが伝統衣裳を着けて、少数民族の舞踊をしてくれた。そのときには、出入口にまで一杯、人がひしめいて見物している。子どもたちは得意気に、可愛らしく動いていた。遠方からの訪問者を迎える祭りのように思えた。帰り際には、自動車のまわりを皆がとり囲んで、なかなか自動車が動けなかった。私もこの子どもたちと名残りを惜しんだ。

この特別な一日から、中国の幼稚園の一般的な性格を論じることはできない。しかし、この一日からも分るのは、大人と子どもとの間に相互的な関係が密接にあるこ

写真5

とである。大人が子どもを統制してはいないし、子どもが大人に対して反逆的な様子も見られない。むしろ、一緒になって生活しているという印象を受けた。この幼稚園は、中国医科大学で働く女性の職員の子どもだけしか入れない。昼になると、小さい子どもの母親たちが、子どもと一緒に玄関の階段に腰をおろしている。三歳以上の子どもは、母親が夜勤などのとき、夜も子どもが泊ることができる。子どもはそのようなとき、どのような様子なのだろうかと私は疑問に思ったが、子どもたちは明るい表情であった。これも、社会全体の中での大人と子どもの生活の全体の中で考えられねばならない問題なのであろう。後に北京に滞在したとき、天壇公園のベンチに腰を下していると、夜の公園を、父親と子ども、両親と子ども、祖父と子どもが、仲良く話しながら通り過ぎてゆく。八時を過ぎた広い公園の暗い闇の中から、子どもたちのはしゃぐ声が絶え間なく聞える。そして朱塗りの回廊の欄干には、老婆が三、四人腰をかけてしゃべっている。勿論、若い男女のカップルが一番多い。シカゴの夜の公園で、このような光景は想像することもできない。このコントラストを、子どもの問題からも、どのように考えたらよいのだろうか。

瀋陽でも北京でも、幅広い道路を、朝夕には、自転車が数十列をなして、ゆっくりと同じペースで銀輪を光らせて進む。だれひとり、スピードで追い抜く者はいない。私は、これは交通規制によるのかと女医さんにたずねると、それは規則ではなく、全く自主的な規制だという。周囲の人と相互的な自分の行動に敏感でなければ、こういう風にはならないだろう。

私は、軍人が制服を着た時の直立不動の姿勢に象徴されるような、型にはまった集団的規律は、東洋人に共通の傾向かと思っていたが、ここでは人民解放軍の若い兵士たちは、皺の寄った制服に、軍帽をあみだにかぶって、ぶらぶらと気楽に子どもの手をひいて歩いている。日本の自衛官も、昔の兵隊と比べると随分くだけてきたが、この兵士たちののどけさとはまるで違う。日本の軍人の角張った態度や威張った口調は中国人には特別の記

憶を呼び起すらしい。北京のホテルでたまたまテレビのチャンネルをまわしたとき、日本軍が中国の農家に入って中国人に命令しているシーンを映し出していた。これは日本の軍隊の非人間的規律性を強調しているようにも思えた。医師たちは、私に遠慮して急いでチャンネルを回そうとした。この日本独特の軍隊的集団規律の精神は、いまも、私共日本人の中に生きている。これは日本人が国際社会に交わってゆくのに、解決しなければならない問題であり、教育の問題である。教師が軍隊の司令官のようになるとき、教育は失われる。帰国したときは丁度運動会のシーズンで、私はこのことをとくに考えさせられた。

十月十日の夜、馬先生の自宅で、医局の方々の手製の家庭料理をご馳走になってから、夜行列車で瀋陽から北京に向った。寝台車の切符を前日に半日がかりで駅頭に並んで買われたとのことである。二人の立派な医師に案内されて、万里の長城、明十三陵、頤和園、故宮を観光できたのは望外であった。その巨大な規模に驚くと共に、千数百年前、隋、唐の時代に、もっと奥地にある当時の都を私共の先祖達が訪れたときの驚きを想像した。

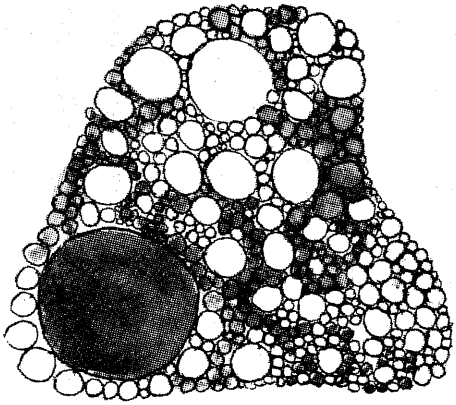
戦争からひきつづいて、文化大革命の二十年間、中国は世界に対して開かれていなかったし、私共も中国を知る機会が少なかった。いま近代化の道を歩み始めた中国が、長い歴史の中で培われた東洋の知恵をもって、近代科学の長短をよく検討しつつ、人間と教育の問題と取り組まれることを切望した。

（愛育養護学校）

SF的読み解き
子どもという風景

第十一回　ウォッチング

堀内　守



街を眺める

通勤する道。通い慣れた道。そこを歩くとき私たちの手足は軽い。特に気を惹くものもない。そう見えるのは「慣れ」ている証拠である。急いで行かなければならないときなどは、まったく時間に追われているから、あたりを眺めるゆとりもない。季節によってあたりの風景は変わる。本当は一日のうちでも何回となく変わっているのだが。

「忙しい」「忙しい」がアイサツになる。そのうちに、おかしなことだが、「お忙しいでしょうね」と言うのが相手を尊敬することになったりする。言われた方もまんざらではなさそうで、強く打ち消しながらも、にんまりとしている。これがサラリーマン社会の出現とともにあらわれた風景である。それ以前はそんなことはなかった。「忙しい」のは生活にあくせくしていることにほかならなかった。「あくせく」とはいかにも体感的な表現である。

忙しがっているうちに、街を眺めることを忘れてしまった人がいる。ゴルフ場へはよく出かけるようだが、街の動きをついぞ眺めてみようとはしない。喫茶店などに悠々と陣取って、ウィンドウの外を行く人びとを眺めるなんて——「そんな暇はないよ」といいたげである。

いま、大根一本がいくらぐらいだろう、なんて関心を喚起し、あちこちのお店を移動観測してみるのも、古書店をまわって、書棚の動きを眺めてみるのも、ウォッチングである。

いちばん勉強になるのが人の動きをウォッチすること。

「ナーンだ。そんなこと。毎日やってる」

と答える方は、まあ、そう顔をきつくせずに。また「ばかばかしい」と忙しがる方は功利主義的にお考えにならずに、ちょっと街情報を手に入れるべきである。

同じことでも、「街情報」などと言い換えると身を乗り出す方もある。そう、そういう時代になった。名前が変わったというような単純な現象ではないだろう。こう言い換えることによって、視野が変わり、それまでぼんやりしていた映画がしだいにはっきりとしてきたからである。

街の動向と子ども

街の動向を知ることは重要である。

第一の理由は、産業構造がどんどん変化していることがわかってくるからである。大変化のまっ只中に身を置いてみると、通りであれ、街並みであれ、業種であれ、

そこを通っていく人びとであれ、みな情報の海のように思えてくる。

この中に「子ども」を加入させてみよう。

彼らの敏感な感覚は、この「海」のなかをどう泳いでいくだろうか。

第二の理由は、消費構造の変化である。何と、子ども向けの商品の数や種類は一つの巨大な市場を形づくっている。玩具、衣服、文房具、食べ物、本。まことに大変なものである。

本店さんの店頭にあるマイコンに群がっている子どもたち。おもちゃ屋さんに並べてあるビデオ・ゲームに夢中になっている子どもたち。自動販売機でジュースらしきものを買い求めている子どもたち。

市場の多様化・細分化はみごとにここまで徹底している。

第三の理由。道路は完全にクルマのものになった。クルマで連れて行かれる子どもたちは、次の瞬間には歩行者に変身する。その変身という現象は子どもだけのものではない。

同一人が場面ごとにどう変身するか、これは眺めようとする意志、連続して眺めてみようとしないかぎり見えてこないのである。

もし、そういう追跡をおこたらないならば、街のウォッチングは、われわれの視野を変えていくだろう。

見られている

眺めているつもりなのが、逆に見られているということもある。それも敏感に感じとれる。

おたがいに視線を合わさないように気を遣っているおとなたちもいる。子どもたちのなかにもそういう気遣いをしている者がかならずいる。

仲間同士でにぎやかにおしゃべりして歩いていく子どもたちはこんな気遣いをする必要はないから交わしていることばもポンポンと弾ねている。そのことばの数々は、現代の細分化した文化のありようをしみじみと考えさせてくれる。

隠語のようで、全然通じないこともある。情報が短期間通用し、あっという間に消費されていく。一つの珍語が新鮮さを競うのは約二週間。二週間で消えていく。かくて、流行に遅れまいとして、みな苛々し出す。

街をひたすら散歩よろしく探索するとこんな風景が見えてくる。凝視とか聞き耳を立てるのに似ていよう。もっとも、近ごろでは聞き耳を立てなくとも、あちらから勝手に会話がとび込んでくる。だれも声高に語るのを恥と思わなくなったのである。子どもたちの会話もカン高くなり、よく聴くと、「会話」というにはほど遠い。ホントは一人一人が勝手にしゃべっている。モノローグに近い。独言に近い。あんなにコトバを消費しながら、実際には空しさのみが浮かびあがったりして。

場所と時間をきめておいて、道行く人びとのファッションや街の様子をウォッチするのも一つの手である。定期観測に似ているが、ただ立っているだけでは芸がない。積極的に取材をしてみるのもよろしかろう。メモ、スケッチ、いろいろなやり方があるが、子どもを観察するにはスケッチ・ブックを帯同するのがいちばんである。スケッチ・ブックはスケッチ用とはかぎらない。メモも取れるし、整理も容易である。子どもがこわがらないのがありがたい。場合によると、のぞき込んできて、こちらの取材に応じてくれたりもする。

一つの街だけでは不十分である。いくつかの遠く離れた街の空間的な比較も結構役に立つ。われわれの頭のなかにできあがっているAという街のイメージとBという街のイメージは、こうすることによってどんどんと修正されていく。世間の人がAという街についてaというイメージをもっているとする。ところが、それはAという街の何十年も昔のイメージをもとにつくられたもので、いまではaというイメージはむしろBの方に近づいているなどということもわかってくる。

子どもが似てきた。どこの街をとってみても。こんなぐあいに「一般理論」がわかってくる。いや、「画一化」というべきだろうか。

看板、宣言、宣伝、商品も似てきた。異口同音に同じ

ことが叫ばれている。「交通事故をゼロにしよう」「地方の時代」「青少年健全育成の町」などなど。

子どもが似てきた。

男の子は自分のことを「ボク」と称する。女の子は自分のことを「ワタシ」と称する。それが日本中どこの学校でも見られるようになった。が、休み時間ともなればオレの乱舞。街路を歩いている子どもたちが口を開き加減にして歩いている。これも全国的に見られるようになった。口を「への字」にきっと結んでいるような子はいない。長い髪を手でしきりにかきあげている女の子もふえた。あのしぐさはOLのしぐさと一致する。

昔の子どもが観念の上で世界の故事来歴に通じたり、最新型の機械の名をおぼえて得意になっているように、いまの子どもたちも観念の組み合わせをバネにして、いまここにない世界に飛翔していく。マンションに住む子は、隣りの高層住宅がアビタシオンだとか、キャッスルであるとか知っても驚きはしない。むしろ、椅子の生活が当たり前になった彼らは、畳に手をついておじぎをすることを経験する機会がなくなった。こんなことを並べていくとキリはないが、一つの時代の変化は、われわれの習慣から知覚の構造までを変えてしまったのである。

キレイとキタナイ

たとえば、こういうウォッチングから得られる成果は「キレイ」だとか「キタナイ」というようなありふれたことばがどういう文脈で使われているか、さぐれるところにある。「キレイ」と「キタナイ」とはいろいろな意味で使われている。ちょっと常識で考えただけでも、「キレイ」は、美しいとか、清潔だとかというように文脈が分れていく。

こんな平凡なことばでも、ある文脈においてはまったく変貌してあらわれてくる。特に人間関係を表現する喩(タトエ)として用いられた場合にはスサマジイ。「キタナイやり方だ」という評価、「キレイ好きなふりをする」などは、文字面ではうかがい知れぬ世界の所在を示しはじめる。

ちょうのように

子どもたちのあいだで激しく交わされている会話に聴き入っていると、思いがけぬ妄想にとらわれてしまう。

これは、この子やあの子というように特定できる者たちが会話をしているのではなくて、これまで人類が開発してきた共有財産である言語を子どもたちがつぎつぎと新しく組み合わせ、言語ゲームを楽しんでいるように思えてくるのである。

ことばの方が主人公で、子どもたちはむしろ、ことばによってしゃべらされているのではなかろうか。あるいは、子どもたちは花粉を運び、花から花へと渡り歩くちょうのように、ことばの花園を飛びまわっているのかもしれない、と。

「あ、キレイなハナ」
「ああ、キレイなハナ」
「え、キレイなハナ？」
「ま、キレイなハナ」
「ボクがまっ先に見つけたんだぞ」
「いや、ワタシだよ」
「ボクだったらサ」
「フン。なら、キタナイよ、あんなハナ」
「じゃ、見るなよ」
「ウン、見てやらないよ。キレイじゃないもん」

「ハナ」はたまたま彼らの口を開かせたにすぎない。そこで交わされている会話は、むしろこの二人の、それぞれの〝自我〟を表出し、合わせてそれぞれの〝レトリック〟を表現している。小学生であれ、中学生であれ、こんな形でことばを学んでいくのである。いいかえると、ある場面において、ある状況において、つき放したり、近づけたりして、指示し、組み直し、命名し、頭をはたらかせながら。

これは明らかにゲームと構造を同じくする。花が「キレイ」であるかないかはさし当たっては死活問題ではない。どちらが先に見つけようがかまわないのである。なのにそのことをあたかも死活にかかわる「重大」問題で

あるかのように語り合う。

高感度人間

たまたまひとりでその花に出会ったとしよう。そうすると、「あ、キレイなハナ」というのは、他人に伝えようとする目的で発したのではなく、自分に向けて、自分で自分に確認するのが目的である。「キレイなハナがそこにある」ということと、それを見つけた自分の双方を自分に伝えようとしているわけである。

相手がいた。

状況が変わった。もし相手が何も言わないでつっ立っていたなら、文脈はまったく変わっていくだろう。「見えないの？」というように。あるいは「どこに？」と向うからたずねたかもしれない。いずれにしても、何らかの反応は示すだろう。

「いいお天気ですね」という語りかけはインターナショナルに用いられている。知らない人と交わす最初のことばとして、この表現は実に効果的である。お天気の話、それは天気について語っているようでいて、実のところ、語りかけた側が自分は警戒しなくてもよい人間だ、安心してくれ、という意志を伝えている。これなどはウォッチングの初歩的な例というべきだが、さりとて安易な例と見なすことはできないだろう。

もし、こう言ったからといって、相手側がこちらの意図を理解できなかったらどうなるか。人見知りをおぼえた子どもに向かって何か語りかけた場合のように、こちらの意に反して、わっと泣きわめくかもしれない。そうなれば、こちらがいくら警戒しなくてもいいと強調してもアトのマツリだろう。

街にはこんな場面もいっぱいあるのだ。

音・リズム・意味

騒音もある。音楽もある。どこからどこまでが音楽で、どこから騒音というべきか。境界線はきまらない。ある人びとにとっては音楽であるはずのものが、他の人びとにとっては騒音としてしか感じとれぬことも充分起

こりうる。

感覚遮断という実験がある。人を音も色も匂いもない装置に閉じこめるという実験だ。静かなところに行きたいと日頃からねがっている人でも、この実験を受けると、完全な静けさがいかに耐えがたいかを身をもって知ることになる。さりとて、逆の極端な場合はわれわれの身体のリズムが狂ってしまうのである。

音の意味も相対的なものである。子どもはあるていどの騒音がないとかえって落ち着きをなくす。いろいろな音を聴き分けるのも彼らの生活情報の基礎をなす。

それはまるで俳諧歳時記のように子どもたちの日常会話の中にあらわれる。ストックされていることばは、何かのきっかけで組み合わさり、とび出してくる。

「あ、キレイなハナ」

こんなに短かい表現でも、しかるべく整理し直してみると、大変高度な学習の所産であると考えざるをえない。

「あ、キレイ、そのハナ」

「あ、そのハナはキレイ」

「あ、キレイだ。そのハナは」

「あ、キレイだこと。そのハナったら」

主体の位置と情が「ハナ」という指示対象といっしょに表出されてくる。「そこにキレイなハナである」という「報」に「情」が加わって、はじめて「情報」となるのである。

「ハナ」ばかりではない。ほかにもいろいろなものがあったろう。それなのに、とりわけ「ハナ」だけが浮かびあがった。なぜだろう。実はそこには一つの秩序がはたらいている。わけのわからぬ混沌としたものは情でもないし、「報」でもないだろう。「情」と「報」が結びつくことによって、まわりの状況は一つのまとまりをもったものとして形づくられるのである。

異形なもの

もしも街を行く人びとのだれもが一言も発せず、街の騒音が何も聞こえてこない状態が現出したとしよう。無

声映画のように。そうしたら、静かさ、静寂さよりも不気味さが感じとれる。

そういうことは現実にはない。あり余った精神の余剰は、街行く人びとのしぐさ、表情、歩き方にいたるまでニュアンスやアクセントを与えている。幼児から青年、青年から壮年、はたまた高齢者にいたるまで、独得のポーズやポジションを見せてくれる。

これらをのっぺらぼうなものとして一様なことばで括ってはいけない。「大衆」「市民」「庶民」等はあまりにも大味過ぎる。

ニュー・メディア時代といわれ、ニュー・メディアがじわじわと浸透しはじめている。それを一つの例にとってみれば、これにもっとも柔軟にとびつくのは子どもたちであろう。サラリーマンが社命で研修に出かけ、苦労して修得すべきものと思い、ニュー・メディアを異形のもの扱いするのに対し、子どもたちにとってはニュー・メディアは遊び仲間の一つにすぎない。街をウォッチングすることは、こういう動きをキャッチするよい機会なのである。

系統的な学習といえば、多くの人が階段のイメージを思い浮かべるらしい。一段、一段を順序よくのぼっていくというのがそれらしい。しかし、道ははたして一つだけなのか。階段を二段とびにとびあがってもよいではないか。あるいは、階段イメージが修正され、別の異形なものに変化するのも悪くはないのである。

エスカレーターに乗る。子どもの多くはじっと立ってはいない。かならずエスカレーターの上をかけのぼりたがる。仲間といっしょであるときはこれが一段と活発になる。お調子に乗るのである。

ではなぜそんなことが起こるのか。

いくつかの仮説を立ててみよう。そして、丹念に街中をウォッチングよろしく歩きまわって見る。お調子に乗る。呼び合う。呼応する。ささやき合っている。ざわめいている。ふざけ合っている。じゃれ合っている。

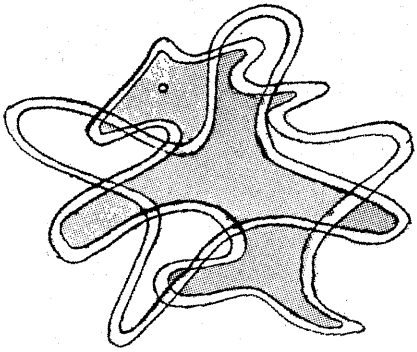
これらの全部がコミュニケーションとしてあらわれてくる。特定の目的に限定されないコミュニケーション。

コミュニケートすることだけが目的のコミュニケーションだ。

仲間の悪口を言い合っているときの子どもたちの何と生き生きしていることか。ムラではこうはいかない。だれが聞き耳を立てているかわからないからだ。密告のない世界で散々に悪口を言い合ってさっぱりした面もちで帰ってくる子どもたち——。このコミュニケーションには「現在」以外の活路は出現しない。「十年後」とか「三年前」というような時間枠は論外なのである。まさに「いまのいま」を生きている。

「だいたいオトナたちがいけないのだ」と力んでいる少年少女の面もちを見よ。この風景は何十年も前にも見られた。何十年もの前の少年少女たちは、いまは「オトナ」になって、あのときのことはすっかり忘れているのかもしれないが、街をウオッチしてみると、「オトナ」という表現がしだいに輪郭を失なって、「コドモ」と溶け合ってしまう。街は「コドナ」にあふれている。

（名古屋大学）



雪ん子たちの冬

水野恭子

小学校三年生になる娘に、「冬っていったら、何を想像する？」と聞いてみました。娘は即座に「雪」と申しました。十二月末から三月半ばまで雪にうずもれるこの地方（越後高田は日本一の豪雪の記録を持っています）に住んでいれば、冬とは、まさに雪そのものなのでしょう。

十一月、実りの秋の取り入れが終わり、山々が美しく紅葉してくる頃から、大人たちは雪への準備を始めていきます。男達の仕事は冬囲い。庭の樹々を竹と縄で上手にくるんで

いきます。一本一本に杭を打ち、竹を立て、まとめて縛り上げていく作業はなかなか骨のおれるものです。大きなガラス戸や玄関のポーチなども落とし板などで囲っていきます。女達は漬け物作りや衣類の準備です。昔のように交通がマヒして食べ物が入らなくなるということが、まずなくなった今日、越冬用の食物準備はほとんどいらなくなり、いつでも必要なものが買えるようになりました。どんなにか楽な暮らしになったでしょうか。それでも、この季節を逃すと、蒲団干しなどは春までできませんから、暖かい日に大根と並んで蒲団が干されている光景をよく見ます。

そして十二月、雨がみぞれやあられに変わりかける頃、人々は急に無口になります。長い冬を思うと誰しも憂鬱になってしまうのです。そして、ついに初雪。一面が銀世界になると、人々はまたおしゃべりをしだします。「降ってきましたね。」「これ位で止まればいいんですけれど。」等々。雪の話が挨拶のかわりになります。その時の顔には、諦めに似た一種独特の清々しさがあります。

大人たちの心とは裏腹に、雪が降って大喜びなのは子ども達。ワイワイといつも以上に賑やかに雪の中を登校していきます。色とりどりの防寒ブーツや長靴をはき、アノラックを着て、サクッサクッと歩く足どりは本当にほがらかです。子どもはまさに雪ん子そのものなのかもしれません。

雪がどんどん積もっていくと、もう雨傘をさす子はほとんどいません。雪は雨と違って、アノラックの下までびっしょりになるほど濡れることはないし、第一、雨傘の上に雪

が溜るので、とても重くて何度も払わなければならないことは、子どもには面倒なのでしょう。それに積雪で狭ばめられた道を傘の行列が歩いては、車がうまく通れません。そんなこんなの理由から、子ども達の服装はいつのまにか限られていったのだと思います。

昔のわらぐつにござぼうしという姿は町の中では今は見ることはできません。大人のかくまき（一枚の毛布のような布をはおる外着）もほとんどが消えてしまいました。根強く残っている昔ながらの冬の衣類といったら、室内用のはんてん、ちゃんちゃんこでしょうか。綿の入ったこれらの上着は暖かく、肩が凝らず、しかも着やすくて、手放せない一枚なのかもしれません。

さて、視点を雪の上の子ども達の上に戻しましょう。学校から戻った子ども達は、実にいろいろな遊びを展開してくれます。子どもらは遊ぶ時は、必ずズボンの上にオーバーズボンを着用し、手袋をしっかりとつけて集まってきます。長時間雪の上で転がって遊ぶには、それが最適だからです。

他の地方の人も容易に想像できる遊びの第一がスキーです。もちろん家の回りでの遊びですから、山スキーとは大部趣が異なります。除雪のしていない小路の起伏の上で滑走したり、雪おろし後の雪山の上から滑ったり、田んぼの畔道のスロープを滑ったり、自然にできたスロープを上手に捜して滑ります。そのためには、スキーが体の一部になっていかないとうまくいきません。歩き始めるとすぐにスキーをはく雪ん子達には、それがごく自然な成り行きなのです。スキーはスポーツであり、高度な技術が必要だなどと悟ってしま

ったり、やれフランス式だ、スイス式だと型にとらわれていくのは大人の話であり、子ども達には関係のないことなのです。

最近、スキーよりも人気が出てきたのが、そり滑りです。スノーボートといわれる遊具に大小いろいろな種類が生まれ、普及しています。子どもらは自分の体にあったスノーボート一つ持ってくれば、スキー靴もストックもいらず、簡単に楽しめるようになりました。道具が手軽で安価、かつ、バランスをとって坐っていればできるという簡単さは、特に低年齢の子ども達を雪に誘ってくれました。歩き始めたばかりの子をひょいと乗せて、親が引っ張ったり、緩いスロープをいっしょに降りたりする姿もよくみかけます。小学生も低中学年位までの子どもは好んで乗るようにみえます。

スロープの話が出て来た所で、どうしても雪おろしのことにふれなければと思います。雪おろしとは、屋根の上に積もった雪を取り除いてみる作業のことです。七十センチメートルの積雪は一トンという重さになると聞きます。ほっておけば、三メートルにもなる積雪をそのまま屋根の上に置いておいたら、家がぺちゃんこに潰れてしまいます。現に昨年のどか雪は、多くの家で雪おろしが追いつかず、梁が折れたり、軒先にせり出した雪庇の重さで軒が折れたりして、多くの被害がありました。我家も、夜中にビシッという音（弱い部分にひびが入った音）を聞き、あわてて雪をおろしましたが、やはり、春、雪どけを待って柱を一本補強しなくてはならないはめになりました。どか雪は、とにかく一晩で一メートルもの積雪をもたらします。自分で自分の家を守らざるをえないのです。

町並が続く市の中心部の雪おろしは豪快です。市からの指令で日時を切って一斉に道路に雪がおろされていきます。道路はあっという間に三メートル以上もの雪の山になります。人々はがんぎの下を歩くしかなくなります。そんな日が丸一日、二日目からは道路の排雪が行われます。パワーシャベルでトラックへ次々と雪が投げ込まれ、それが堀や川に捨てられていきます。それが二日間。四日目の朝には交通マヒがうそのように消え去ります。

けれど住宅地はそうはいきません。雪おろしされた雪は春までそのまま、消えるのを待つしかありません。又、道路も排雪ではなく除雪（雪を道の両側によける）のため、道路に積もった雪まで小路に入ってき、その山といったら大変です。庭がないと、本当に困るのです。

ところが、子ども達にとっては、雪おろしはとても嬉しい日です。年長の子は、お手伝いに汗を流しながらも楽しんでいます。何せ、軒の高さと雪の高さが同じになり、しかも固くしまった雪ですから、乗って埋まることもありません。急に住む世界が高くなった感じがして、いい気分なのでしょう。それに、雪おろしが済めば、その高い山々は自分達の世界になります。子ども達のワクワクとした心の動きが、雪に疲れた大人達にとって、どんなにか慰めとなるでしょうか。

こうしてできた雪山で、スキーにそりに、一汗流した子ども達が次に始めるのは大抵雪穴ほり。横にほればかまくらになり、縦にほれば落とし穴になります。この落とし穴は不思議なことに田んぼや空地のまん中にほられます。ですから、決して誰も落ちないので

す。落ちて楽しむのは自分だけ。きっと、ほることそのものが嬉しいのでしょう。もっとも、ほろうと思っても道路の雪は固すぎて、子ども達の力には余りますが。

かまくらはままごと遊びの出発点になります。秋田の方では、このかまくらで餅を焼いて食べるといいますが、越後高田にはそうした風習はありません。あくまでかまくらは遊びの一つなのです。

ままごと遊びで一番おもしろいのは、雪おろし後等の固い雪の上に三十センチメートル位の新雪がのっかった日です。子ども達は新雪を踏んで部屋を作ったり、廊下を作ったり、道を作ったり、一面の大地に大らかに場面を作っていきます。そして、時にはきれいな色水を持ってきたりして、細々としたお料理作りも展開されていきます。手や足が寒さでしびれ、鼻水をたらしていても、この遊びを止めようとしません。それほどにダイナミックで楽しいのです。夏場の砂遊びが、まっ白できれいな雪に変わり、かつ汚して叱られることなく大地いっぱいに展開されると考えて頂ければ、その醍醐味は想像して頂けるのではないでしょうか。

屋外での遊びで冷えきった子ども達はやがて家の中に入ってきます。「まあ、こんなにビショビショになって」と一言いわれながらも、暖かい部屋で着替えが終わる頃には、ほっぺも手もポカポカと暖かくなっています。そして家の中の遊び、これはきっと他の地方と大差はないのではないでしょうか。絵を描いたり、本を読んだり、ゲームをしたり、何かを作ったり……。

雪国の夜は音もなく更けていきます。すべての音が雪に消され、あまりの静けさに障子を開けると、大きなぼたん雪が降り続けているのです。

三月の春一番が吹く日まで、雪の中、平和な日々です。あまりに大きすぎる〝雪〟という自然の前で、人々はただ頭を垂れ、じっと春を待つしかないのかもしれません。

ああ、春よ来い。早く来い。そして、「雪とけて村いっぱいの子どもかな」（一茶）やっぱり土がいい。かげろうのもやもやあがる春を大人も子どもも待っているのです。

（新潟県上越市在住）

＊　＊　＊

幼児と演劇をめぐって ①

幼年時代の演劇体験

冨田博之

大学生の〈演劇体験〉調査から

東京のある私立大学の文学部の共通科目の一つとして、「演劇教育入門」という講座を担当して三年になる。講座の内容は、つぎのようなものだ。

「人間関係成立の基礎となる表現とコミュニケーションの感覚・能力は、演劇活動をとおして、もっともよく身につくといえます。演劇教育とは、それをめざす活動ですが、その理論と方法を実習を交えながら学習します。」

（履修要項から）

この講座には、年ごとに漸増して、ことしで、文学部の各科から集まってくる一五〇名ほどの学生（男女比は三対七ぐらいで女子学

生が多い）が受講しているが、例年、講座の初めに、学生を対象に、ちょっとした調査をさせてもらうことにしている。レポート用紙一枚に、つぎのような三つの〈演劇体験〉について書いてもらうのである。

(A)これまでの〈演劇活動体験〉（どんな劇をつくる活動に参加したことがあるか）

(B)これまでの〈演劇鑑賞体験〉（どんな劇を見たか）

(C)これまでの〈戯曲体験〉（どんな戯曲・脚本を読んだか）

右の三項目について、簡潔にレポート用紙に書いてもらうのだが、このうち、(A)の〈演劇活動体験〉では、幼稚園や保育園での体験も、あれば書いてくれるようにコメントするせいもあるが、大半の学生が、就学前の幼年時代の演劇活動体験について書いている。

記入例を原文のまま少し紹介すると、つぎのようなものだ。

▽私は幼稚園のお遊戯会で「青い鳥」のお母さん役をやり、その後は小学生の時、作者は忘れましたが「折り鶴」という劇をやって以来ほとんどやっていません。（日本文学科二年、女子）

▽幼稚園の時、「白雪姫」で白雪姫をやって以来、何も芝居らしいものはしていないけれど、ちょっと分野は異りますが、高校でモダンダンス部に在籍して、ステージ発表を何度かやりました。（英米文学科二年、女子）

▽幼稚園でキリスト誕生のクリスマスの劇を演り、小学生の時「みにくいあひるの子」をオペレッタで演って以来今日まで直接演劇には参加していません。（英米文学科二年、女子）

▽私の演劇経験の始まりをたどると幼稚園にまでさかのぼります。演劇教育を実践し、

毎月一回くらい、自分達で筋を決めて、半即興劇のようなことをしていました。そのせいか小学校でも演劇部で、中高は五年間（高3は引退してしまうので）演劇部でした。（下略、心理学科三年、女子）

▽保育園のとき「かかし」の役をやりました。ただ立っていただけですが。（史学科二年、男子）

▽幼稚園の学芸会でカラスのお父さんをやりました。高校の時、宮沢賢治の「風の又三郎」の演出と、テーマ音楽の作曲を手がけました。（教育学科二年、男子）

▽幼稚園では子坊主の役、小学校ではリア王の役、「ロミオとジュリエット」の牧師役、「シンデレラ」のいじわるな姉の役をやりました。（ドイツ文学科二年、女子）

ごく一部を紹介したが、大半の学生たちは、ほぼ同じような〈演劇体験〉をしているといってよい。短い時間の、ごく簡単な記述を要求するだけの調査だから、右のようなものではあるが、学生たちにとって、幼稚園・保育所での演劇体験は、かなり強い刺激となって記憶されていることがわかる。「青い鳥」の母さん役とか、白雪姫とか、子坊主の役とか、演じた役割をはっきり書いていることからも、それが、かなり鮮烈な体験として記憶されていることがわかる。お話を聞いたり、絵本を読んだりした体験と比べても、〈演ずる〉ことの体験が、幼年時代の体験として、いかに強い印象を残すものかをうかがうことができるといってよいのではないだろうか。

それにしても、「自分たちで筋を決めて、半即興劇のようなことをしていました」という学生のケースをのぞいて、他のは、どんなやりかたで演じられたものかが、ほぼ推察することができるといってよさそうである。

「青い鳥」や「白雪姫」や、ただ立っているだけの「かかし」の役をやったというところなどから、それは、うかがえるのである。おそらく、脚本によるセリフを与えられ、それを暗誦するような方法で演じさせられた〈お遊戯会〉や〈クリスマス会〉の劇だったのではあるまいか。学生たちの短く書かれた〈演劇活動体験〉の調査からも感じとることができるが、学生との対話をとおして、それを確かめることができたのである。

だが、こういう状況は、この学生たち（六〇年代の前半に生まれている）だけではなくて、いまの子どもたちにも、変わらずにつづいているものとみてよいようだ。

幼年時代の〈演劇活動体験〉は、学生たちの調査からもうかがえるように、強い印象となって残る体験であることは確かだが、その活動のありかたが、そのままでよいとはいえない。では、なぜ、そのままでいいとはいえないのか。それを考えてみたいというのが、本稿の目的の一つである。

幼年時代の〈観劇体験〉

この学生の演劇体験調査で、幼年時代の〈演劇活動体験〉については、多くの学生が書いているのに対して、〈演劇鑑賞体験〉については、あまり書かれていなかった。劇場や幼稚園で、人形劇や児童劇を見た体験を書いている学生もいたが、その数は、たいへん少なかった。それも、劇の題名が書かれていないのである。劇をやった体験では、題名だけでなく、役名も書かれているのと比べて、大きなちがいである。そのちがいは、劇をする体験が幼稚園・保育園時代以後は少いのに対して、劇を見る体験は、むしろ、それ以後

の方が多いか、あるいは、最近の体験にもあるところから、幼年時代の観劇体験が調査にはあらわれてこないということによるのではないかと思う。

幼稚園・保育園時代の観劇体験も、決して少いわけではない。むしろ、いまの学生たちが幼児の時代である一九六〇年代の後半から、幼稚園や保育園の子どもたちを対象とする児童劇団や人形劇団の活動が活発になり、いまも、それはつづいている。

幼稚園・保育園側の調査ではないが、児童劇団や人形劇団が、幼児を対象とした公演をどれだけおこなっているかという一つのデータがある。

職業的な専門劇団の組織体である「日本児童演劇劇団協議会」（略称＝児演協）という団体があるが、これに加盟している劇団は六七にのぼる。このうちの六三劇団が、昨年一九八四年度中に、どれだけの公演をおこなったかという記録がある（児演協の機関誌『児演協』28号）。そのうち、全国の幼稚園・保育園でおこなわれた公演回数と観客数は、つぎのとおりという。

実施園数　五、九六四園
公演日数　三、七八四日
公演回数　六、五〇八回
観客総数　八八九、九五九名

幼稚園・保育園の総数からいえば、公演をおこなった園の数や、観客数は、それほど大きいとはいえない。文部省と厚生省の調査によると国・公・私立の幼稚園数は一五、二一一園、園児数は二、一三二、六八一名（一九八四年五月現在）、保育園は二二、八五八園、園児数は一、九二五、〇〇六名という（平凡社刊『世界大百科年鑑』一九八五年版）。この数字からいうと、公演をおこなった園の比

率は一六%弱、観客園児数も二二%にすぎない。

だが、児演協に加盟している劇団は、幼稚園・保育園を対象に活動している劇団の一部であり、それと同じ、あるいはそれ以上の数の劇団が活動していると推定されるので、この比率は、少くとも二倍以上にはなるだろう。

また、幼稚園・保育園以外でも、子どもたちは観劇体験をしている。たとえば、全国にひろがっている「子ども劇場・おやこ劇場」での公演は、先の児演協調査で二、六六二回、一、三四九、一五〇名の観客数というがこれには多くの幼児がふくまれているとみてよいだろう。その他にも幼児を対象とした演劇公演は少なくないから、幼年時代の観劇体験は、総体として、かなりの比率をしめるものとみてよいと思う。

これだけひろくおこなわれている幼稚園や保育園での演劇活動体験が、子どもたちにとって、どんな意義をもち、また、演劇鑑賞教室の実態（どんな劇団が、どんな演目で公演しているか）は、どうなっているかということなど、あまり知られていないのではないかと思われる。それについて書くことも、本稿の目的の一つである。

さらにいえば、幼児と演劇についてのかかわり――幼児にとって演劇とはどんな意味をもつものか――についても考えてみたい。そのために、幼児と演劇とのかかわりの歴史をふりかえってみたい。それも、また、本稿の目的の一つとしたいと思う。次回は、幼児と演劇とのかかわりは、どこから始まったかについて書くことにしたい。

（児童演劇研究家）

子どもたちのこと

一、「ぼくの家　まだ夜？」（S男　五歳児）

大橋利恵子

S男は、からだの大きな、たくましい男の子である。生活面もしっかりしているが、その遊び方は、実に親分肌で、全体に気を配り指示を与え、自分の思うようにまとめていくという具合である。例えば、先日、どんぐりを利用してパチンコ遊びをしていた時、他クラスの子にもやらせてあげようということになり「パチンコ屋さん」が始まった。机を置いて、画用紙の看板をはり、お金をもらう銀行をやってくれる友達に準備を依頼し、もうすべて整ったかと思ったら、当たりが出た時の景品がない。S男はもう遊び出したくて、ウロウロしている仲間達に「まだ、やったらだめだぞ」と言い置いて、教師の所へ飛んでいく。しばらくして、先生を通して景品作りをたのまれた女子の所へ様子を見に行っては「はやくしてくれ。待っているから」と催促をしに行く。やっといくつか作ってもらうと

「よし、始めるぞ」といよいよ開店。ならんで待っていたお客さんもホッとした様子。

こんな具合に、すべてが彼の指示で動いていくが、決して他人の意見を聞きいれなかったり、横暴なわけではない、このパチンコ屋の時も、玉の入れ方をかえるようにちょっと助言があったら、すぐにその方法をとり入れていた。また、とてもやさしい所があり、小さい組のめんどうをよく見ている。そして事のなり行きで、誰か泣いてしまった時など大きなからだを小さくして、その子の所にかがみこみ心配していたり、あやまっていたりする姿を時々みかけるのである。

そんなS男のあるエピソードを一つ。

ある日の朝、園庭で遊んでいたら、空にまだ月が出ているのに気づいた。さっそく子どもたちに「あそこに出ているのはなんだ」と問いかけた。(問いかけたのはS男の担任である高橋先生で、筆者ではない) 反対側にある「おひさま」は先に確認していたので子どもたちは一瞬、とまどいを感じたようだが、すぐに「お月さまだ」と気づいた。

「え、夜でないのに　お月さまがでてる」

「おかしいね、どうしてかな」

「今、夜?」

「上の方だけ夜で、下の方は昼なんじゃないの?」

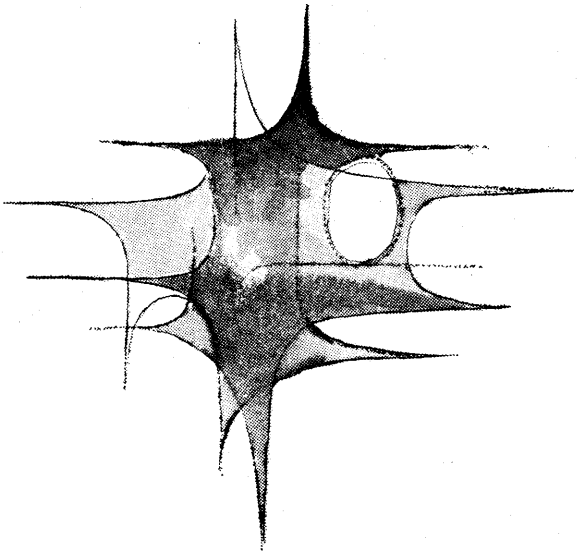
「ちがう、あちらの方は昼で、あそこは夜なんだ」と太陽のある方を指さしながら他の子が言うのを聞いていたS男は

「え、じゃー、ぼくの家の方はまだ夜なのか？」と真剣な表情で問いかけた。

月が出ている方はまだ夜で、太陽の出ている方が昼だという子どもの発想も楽しくて思わず笑ってしまうけれど、あのしっかり者のS男が、「ぼくの家は夜なの？」とまじめに聞いていたと知った時、何ともおかしくてたまらず、つい大笑いをしてしまった。S男なら「ばかだな、そんなはずないじゃないか」と言いそうだと私は思いこんでいた。でも、逆に、S男はそれを信じた。あのたくましいS男にだって、まだこんなかわいい発想が残っている。そう思うとうれしい。そして大切にしたい。やっぱり、子どもっていいな！　とあらためて感じずにはいられなかった。

さて、12回にわたり、いろいろな子どもたちのことについて、つまらない文章を連ねさせていただきました。その一つ一つ、やはり自分自身へのいましめになったような気がします。保育はやはり、保育者次第なのでしょうか。そう考えるとつらくなりますが、「子どもと私との間に生まれるもの」と考えると楽しくなってきます。また、きっと子どもたちが私に何かプレゼントしてくれるでしょう。それがたくさんたまったら、またこの紙面をお借りしたいと思っています。

（岐阜北幼稚園）



やけど

中谷喜久子

「雪の中を歩いていたら『あなた東北人でしょう』と言われたのよ」――東京在住の妹の電話の声に、珍らしい大雪にとまどっている都会人の生活が伺われた。と同時に大人になってからの生活が長くても、子供の頃の体験はその人に染みこんでいて思いがけない時に表れるものだとの思いをあらたにした。彼女は雪の道を危なげなく(転ばずに)歩いていたからだった。都内の雪道での転倒・骨折・救急車の話題が全国ニュースになった三年前

のことである。以来この季節になると、生まれ育ち住み慣れた我が街の、毎日、幼稚園へ通う冬の道をしみじみと眺めるようになった。歩道は少しの雪が降っては踏みかためられ、薄日にとけては凍りして、ツルツルデコボコと固く凍りついている。防寒具に身を包んで私は歩く。足の底全体で地面を踏みしめる様に歩く。「転ばぬように」という意識はないのだが、転ばぬように歩いている。足元が不安定になった瞬間にバランスを取っている。それにしてもよく今まで転びもせずに歩いていたものだと思う。やはり、雪の道、凍りついた道はうっかりすると滑るから危ないということを意識していて、そして無意識のうちに「転ばぬよう」気をつけて歩いているのだと思う。

奥羽山脈で東西に分けられた青森県の冬は北と西の日本海側は大雪となり、東の太平洋側、特に県南は乾燥し北西の風で寒気におおわれてしまう。いわゆる寒冷地であるが、積雪地ではない八戸地方は二月がより寒さを厳しく感じる。登園する子ども達を迎える当番になると、門のところへ立つのにポケットにカイロを忍ばせたりもする。保育室の花びんや小さな植木鉢類は夕方にダンボールの箱に入れ、周囲をおままごと用の座ぶとんや毛布で覆ってひどく凍らぬように気をつける。毎朝各部屋のストーブに点火してからガスでお湯を沸かし、そのお湯で湯沸器や水道の蛇口を暖める。不凍栓を全開（水道管が夜間に凍結しないように水を下げておく事）にしておいても、蛇口に残っているわずかな水が凍ってしまい水が出てこないからである。朝八時に暖房して、九時頃に室温がマイナス四度前後、十時頃にようやく五・六度にあがる。

私達と同時に幼稚園に着く子がいたりする。「お部屋が暖かくなるころにいらっしゃいね」などというが、来たくて、早く来て遊びたくてやってくる子には意味のない言葉ではある。

子ども達は毛糸の帽子、マフラー、ジャンパー、手袋に防寒用長ぐつ姿がほとんどである。オーバーズボンをはく子は意外に少ない。厚着―薄手に厚手の長袖シャツ

を重ね、上にジャージ、セーター、スモックと上に六・七枚、下には薄手に厚手のズボン下を重ねて四枚、の子もいるし、素足に上ばきで過ごす子もいる。

気温が低く、強い風が吹きすさぶので、自然に室内で過すことが多くなる。ホールは長なわとび、室内鉄棒、飛び箱、大型箱積木等の遊びで賑う。いつもは絵本コーナー・せいさくコーナー・絵画コーナーで楽しんでいるのに、この時季にはストーブの周りに机を運んできてそれぞれのことをしている。今まで開放していた玄関の戸や保育室の戸はその都度閉めるようになり、私達は換気やストーブの周囲の子ども達の動きに気をくばるようになる。

子ども達は雪の日を待っているがなかなか積らない。県内の青森・弘前の積雪地方のように除雪した跡がすぐ埋まるような「雪ふり」はめったにないのである。気温が低いために雪が固まらず雪だるまにならなかったり、両手で雪をすくって相手にかけたりする雪合戦になったりするが、それでも待望の雪遊び日和りになると園庭へ飛び出して行く。一番人気のあるのは「そりすべり」で、みんなで雪をかき集めてジャングルジムのすべり台にスノーボートで滑り降りることが出来るように場所をかためる。この遊びには少しばかり勇気が必要なので、気の弱い子はしばらく見物してから列に並んだりする。すべり台をすべり降り、途中の鉄棒の柱にぶつからぬよう上手に舵をとり、ゆるいカーブでいくと向うのブランコのところまで滑っていく。二人乗りをする子もいる。「せんせいもいれてね」「えー、せんせいもやるんだって」、その先生がすべりおりるといつもカーブのところで横倒しになってしまい子ども達から笑われる。六台の青色赤色プラスチック製のスノーボートが活躍する。砂場のあたりで雪でおままごとをする子たちがいる。雪合戦が始まる。そして遊び終った後ぬれた手袋などはストーブの囲りで乾かす。

五十七・五十八・五十九年度の園日誌の二月を繰ってみた。

57・2・8（火）晴　登園の出足が遅く、九時から九時半。自由遊び・ままごとにN先生が入ってさくら（三歳児）の子たちが楽しそう。「かごめかごめ」で十名のこどもたちがK先生と一緒に長い時間あそび、最後には鬼ごっこになった。

57・2・9（水）曇りのち小雪　流感のため臨時休園

2・10（木）晴　流感のため午前保育、53名中17名欠、36名出席（内8名かぜひき）みんなで切り紙をした。

2・12（土）曇り　異常寒波のためとても寒い日だった。フォークダンス「手のひらを太陽に」パートナーチェンジを楽しむ。

2・19（土）雪時々晴　今年初めての大雪、子どもたちは大喜びで雪だるまを作る。雪合戦をしたり、すべり台を作ったり楽しかった。

58・2・3（金）曇り　八時四十分頃からぽつぽつ登園する。新聞紙で刀（サニバルカンの剣）をつくり、それを持って三・四歳児男が遊ぶ。各クラスで鬼の面を作る。毛糸や紙テープを使う。

2・4（土）曇りのち雪　今までに一番寒い朝となる。登園の足が遅い。真冬日が続く。

2・15（水）晴　年長児、好んで鉛筆で絵を描く。

2・16（木）晴　年長組、小学校一年生四クラスの授業を見学に行く。

2・22（水）晴　箱積木でおばけ屋敷・入場券を作って遊ぶ。

2・28（火）晴　降り続いた雪が朝には止んで、青空がひろがりおだやかな朝となった。あまり雪が深いので室内で遊ぶ。ホールでは長なわとびが盛ん。

3・18（水）晴　ことり組のM・S・A・T達がぶらぶら遊んでいて、あまり片づけなどしないとのこと。きっと充分に楽しんでいないからではないだろうか。気をつけて声をかける事にする。

59・2・11（火）晴のち曇り　今年初めての雪あそび。園庭すべり台でそりすべりをした。

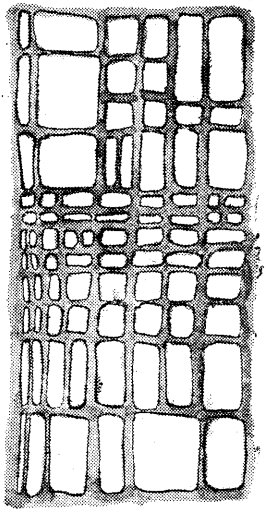
2・14（木）晴　外で雪合戦、そりすべり、砂場遊

び用の空缶から氷を出す等三十名ほど。うさぎ組全員でそりすべり。

……自由遊びに屋外で遊んだ日は思いの他少ないのに驚いた。風がおさまり晴れの日にはほとんどの子ども達が園庭に出て遊ぶのであるが、そのような日はめったにないという事である。晴れていても風が強くこちらの方言の「凍(しば)れる」日には「外で遊ぼう」とはあまり言わない。二月はそのような日の連続なのだ。

ほとんどの家庭の暖房が、炭火のこたつと火ばちだけだった昭和二十五年頃—私が子供だった頃の子供達は足袋に「かねげた」をはいてすべって遊んだ。田んぼでも滑ったが、田んぼまで出かけるよりは、ほとんど家の近くの道路で遊んだ。馬そり（馬にそりをつけてひかせる）が通ると、それにつかまってすべったりもした。スケート靴は見たことがなかった。スキーで遊ぶことはほとんどなかったように思う。

そのうちに自動車が多く通るようになり、「路上で遊んではいけない」と学校の先生から云われて不満に思っ



たものだった。小学四年の頃だろうか。一つ違いの兄と白く光る夜道のまん中を滑ったことを思い出す。数年前に、町内の子供会をお世話しておられる年輩の方が「まンず、わらしァ遊ばねぐなったなス。みなどごの家でもテレビ見でる、外サ出なぐなったよ」と話されていた。(本当に子供は遊ばなくなりましたね、どこの家でもテレビを見ていて外へ出なくなりました)

現在幼稚園の年長児では二十三名中、スイミングスクール六名、お習字教室七名、ピアノ三名、バレー一名、日舞一名、塾一名それぞれ通っている。テレビ視聴だけではなく、おけいこ事が幼児の生活に入りこんできており、小学生ではなおさらということであろう。滑って遊ぶスキーやスケートはそれぞれの場所へ行かなければならず、時間的にも空間的にもゆとりが無くなっている。暖房のきいた暖かい部屋から凍(しば)れている外へ出るには、親も子も決心が要る。冷たく寒い戸外での楽しみ様が少くなり、あまり楽しまなくなったのは、子どもの生活が変ったのではなく、大人の生活の仕方そのものが変化し、その生活の反映の中に子どもがいるのだと思うのである。

冬休みが終って三学期が始まる頃にはジャンパーやオーバーを一人で着る事が出来る三歳児が多くなる。「手を入れたら指を順々に入れるのですよ」「しっかり端を持ってきちんと中に入れてからファスナーを上へ引っぱりましょう」「袖口を持って脱ぎましょう」「裏返しの袖は表にしてから掛けましょう」とその都度指導をする。

四歳男児Hの昨年の今頃のこと、帰りの身仕度をしている時、防寒具のファスナーを一人でしめることが出来たので、思わず「お兄さまになりましたね」と声をかけた。数日後、彼の母親から「先生この寒いのに『半コートは嫌だ、チョッキを着ていく』といってがんばるんですよ」と困った様子で云われた。Hに理由を聞いたら「半コートは(ファスナーが)できないけれど、チョッキだと(自分で)できるから」とのことだった。「半コートのファスナーもそのうちに一人で出来るようになりますから、さむーい日には着ていらっしゃいね」と話しはし

たが大人の思いの外にある、一人で出来ることの自信とうれしさを大切にしたいHの気持と、甘えん坊の彼がちょっぴりたくましくなった事を思い、私までうれしくなった事だった。

今年度は十月下旬に各部屋にストーブを据えつけた。大きなストーブに煙突を取り付けて木製の頑丈な枠をまわし、煙突にガードをはめる。紅葉したもみじやいちょうの葉を大事に持ってくる子、容器に土と霜柱を入れてきて見せてくれる子、「しもだったのに」と湿ったハンカチをそっとひろげる子、少し前はお山で拾ったどんぐり、「おかあさんのおかあさんのおうちのおみやげ」のくりやぶどう、りんごの枝であったが、この時期は遅い秋で賑やかである。十一月の初旬は最高気温十五度等の小春日和りの日が数日続き、中旬に初雪となる。

この季節のこの時―ストーブを据え、煙突にガードをはめる―に条件反射のようにYの顔を思い出す。苦さと懐かしさが混り合って浮んでくるのである。……登園した彼の指にほうたいが巻いてあった。「きのう幼稚園でやけどをして、病院に行ってきた」とのこと。「私のクラスの子が私の保育室で！」全く気が付かなかったので、驚いて状況を聞いたら「えんとつに指をつけた」とのことであった、枠の中の煙突のガードの細いすき間から指を入れて、煙突にさわったのであった。その日Yの家へお詫びに伺った。子どもは思わぬ事をするものだと改めて思ったが、我慢して一日を過したその子の痛みに気づかなかった保育者としての自分への責めが大きかった。指がこごえていてストーブに触りたいほど冷たかったのか、ストーブ本体はヤケドしそうだけど、煙突の方はどうかと実験をしたのか、子どもの思いがけない行動にもその子なりの理由があったのだと気づいたのは、幼稚園の先生をしてしばらく経ってからの事だった。ストーブを使う時期になると、もの静かだったYの面影と若かった自分の懐かしいような苦いような思いをこめて、「やけどをしないように」と注意をするのが常となった。今大学生の年頃の彼はその後転居して八戸にはいない。

（八戸小中野幼稚園）

痛いの痛いのとんでいけ（その一）

蕪木寿江

「給食を食べるようになって、おかわりもするようになったんですよ。『食べる』ということは大事なことですね。人間味がでてきましたよ」と、嬉しそうに、夕暮れの電車の中で向うから声をかけた、お母さんもK夫も太って色白の頬がほんのり紅かった。

S医科大学の「ことばの治療教室」からの紹介で、時々遊びにきていたが、一年就学を猶予して入園した五年前は言葉はすでに出ていたが、友達に興味はなく、勿論、「食べる」ことに関しては一定のものを除いては、殆んど関心がなかった、当時の日誌から抜粋してみよう。

――古切手蒐集のころ――

六月十二日

朝は古切手を集めることから始まるが、いくらか落ち着いてきたように思う。今日も雨なのに自分から幼稚園に行くと言いだしたとか……。鉛筆は周りが一色のもの

だけがよくて、他のものは箱から出す。うちわの染めものをはじめたら、「待てない」と言ってお母さんの膝の上に寝る。紺色・青色・水色の中で水色がいいと言う。二つ欲しいと言うので渡すと、五百欲しいと言う。「五百、無いのよ」と言うと、「疲れる、疲れる」と言って寝ている。自分がどうしてよいかわからない時は、「疲れる」を連発する。お昼にならないうちに、ままごとのコーナーで牛乳を飲んで、ビスケットを食べる、K夫が食べることで何か満されるのか、誰も何も言わない。自分の遊びに夢中なのかもしれない。みんながお弁当の時は、積木で印刷屋さんを作って印刷機で刷ったという手紙をくれる。次に売屋さんになり、各部屋から、鞠、ぬいぐるみ、お人形を集めてきて、積木の囲いの中に入れる。「指人形をくださいな」というと、「三百円です」と言う。「はい、三百円」と言って手の平をたたくと満足する。紙芝居のときも傍で絵を描いて静かにしている。

六月十五日

「風邪気味なので、二、三日休みます」と電話があったが、走って部屋に飛び込んでくる。先生に逢いたくてきたのでもなく、友達と遊びたくてきたのでもない。ただ、切手に魅かれて各部屋を走りまわる。お母さんが歯が痛そうだったので、その間に帰っていただく。午前中、初めて一人になる。別にお母さんを探すわけでもなく、集めてきた切手を分ける。「どうして二十円切手が多いの？」「記念切手は大きいのだよ」「四十五円切手を集めて」と話しながら、自分に必要な切手だけをよけてあとは机に乗ってばら撒く。友達がそれを拾って箱に入れると、また投げて箱も投げて喜ぶ。撒かれた切手をこんどはざるに入れていると、(友達はこの切手が大切なものであることをよく知っているので) また、また切手を投げ、ざるを外に投げて喜ぶ。丹念に拾い集める友達もこの繰り返しが面白そうである。人とふれ合うきっかけになれば——と、そおっと思う。「蓋のあるものをちょうだい」と言ったので、瓶をあげるとその中に切手を

入れて、コーナーの畳の上で横になってみている。久しぶりのお天気なので、「外にいかない？」と誘うが聞こえないらしい。本（グルンパのようちえん）を持ってきたので、だっこして読む。少し落ち着いて聞いていたが、膝から降りて一人で続きを読む。外でリズムをしている友達にレコードをかけていると、椅子の上に乗ってみていた。ポンと降りた時、レコードが止ったので、「静かに降りてね」というと、静かに降りた。「今度は何をかけるの？」と、一枚ずつ渡してくれた。まわっている間中、じっと見ている。牛乳をほんの少し服にこぼしてもそれが気になるのでとり替える。お弁当は全く食べない。グルンパのようちえんを各部屋から集めて本棚に並べておく。積木で公園をつくり、「入口から入ってここで本を読んで下さい」という。黒板ふきをたたく棒を開閉に使って、出口から入ったら物凄く怒った。「先生だけ入って下さい」と言う。友達との関係はない。部屋の切手入れがいつも一定の場所にあることが、K夫にとっては安心なことで、プラスになると思ってそのままにしておいたが、どうしてよいかわからない。たまよちゃんが、「Kちゃん、お弁当食べられるようになるとみんなと遊べるんだね」という。お母さんがいない方が要求したり、泣いたりすることがなく、なんだか静かな感じがする。

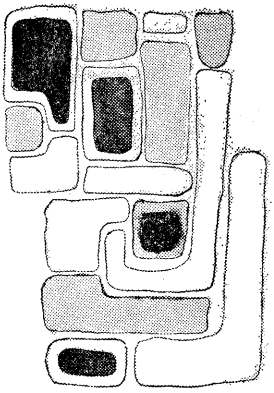
六月十九日

登園すると同時に切手集めを始める。みどり組は一枚しかなかったが、他の組で気に入ったのがあってよかった。「五百九十円は小包だよ」といって大事にする。椅子で四角に囲をつくり、金額毎に分け、十円、二十円、五十円はいやだといい、高価な切手、珍しい切手を喜ぶ。切手をその場におき、今度は絵本集めに奔走する。ブロックを入れる籠の中に本を入れて、それを三段に重ね、一番上に布団をかぶせる。きらいな本は持ってこない。友達が椅子を取ろうとして切手がバラバラになってしまったのを見つけ、泣いてさわいだ。「疲れちゃう」と言い、「暑い」と言ってランニングとパンツになり、

先生の膝に眠る。K夫の館があるので机を出せずにいると、いい顔をして傍にきたので、「お引越して」というと、切手と本を動かす。「お手伝いしてね」というと、椅子を四つ持ってくる。ストローが欲しいというのであげると、「ぬるい、ぬるい」といいながら牛乳を半分飲む。お弁当の玉子豆腐は冷えているのに食べない。ポテト風のほそいスナック菓子を、畳のところで寝そべってよく食べた。みんなのお弁当が始まると、隅の方でマジックでいつもの地図を書く。外へ出るきっかけをつくろうとしてもなかなかのってこなかったが、「先生と外へいかない？」と言うと飛んで外へ行って、みどり色のお茶碗にお水を汲んで手押車にあけた。「パンツじゃおかしいからね」というとすぐズボンをはく。水汲みを続け車をひっぱって遊んでいたが、部屋に入り切手を水につけてはがしたいと言いだす。ネパールに送る話をしてもわからない。切手を持って帰ると言うので、ビニールの袋に入れると、「印刷してある使用済みの封筒でないといけない」と言うので、珍しいのだけ七、八枚入れてあげると、お母さんに抱かれて帰る。

六月二十日

「今日は幼稚園に行かないのかしら、と思っていたらさっさと出かけて行くので……」と、お母さんが言われる。十時半登園。いつも置いておく切手入れが定位置になくて、「しまった！」と思った。K夫も一瞬あわてて探していたがあきらめて他の組に行き、「気にいったのがあったよ」と言って喜んで戻ってくる。切手をしばら



く見ていたが、おいたまま紙芝居の、「空の色はなぜ青い」を持ってきて、「これやって」と言う。丁度、貧血で具合が悪くなったS子の介抱で手が離されないでいたため、(いつもは、やってということはすぐにしてあげているが)、「あとでね」というと、怒らないで、積木で「小さいお家をつくるの」と言ってつくりだす。よしえちゃんが、「何つくるの?」と聞くと、「何をつくるかわからない」と返事をした。初めて友達と会話ができた。みんなが歌っていると、「どうして歌をうたうの?」と言う。「歌うと楽しいからよ、お隣のお友達の声も聞こえるでしょ」と答えると、それ以上はしつっこく聞かなかった。今までだと、「どうして、どうして」と混乱するまで聞いていたが、それがなかった。お迎えにきたお母さんの顔も心なしか明るい表情に見えた。

六月二十二日

九時十五分登園、「朝早くから幼稚園にいくといって一人で着替えて、ひきとめるのに大変だった」とお母さんが言われる。今日は切手入れは部屋に置かないで様子を見ようと、先生方で申し合わせる。「切手どうしたの?」とすぐに聞く。「ネパールの可哀想なお友達に送ったの」と言うと、「どうして?」と聞く。「切手四百枚で一人分の注射ができるの」と話すと、聞いているのかわからないが、部屋中を見まわし無いと思ってか、溜めてある空箱を放り出し、足で蹴とばして歩いた。しばらくの間そうしている。そのうちに牛乳の空箱を三つ持ってきて放っては遊んでいた。二つずつ重ねてある椅子の脚の中に本を投げつけはじめた。「投げないでね」と言ったが、隣の組の本も持ってきて投げている。次に牛乳パックを投げ、本にあたるとその本をくれる、というゲームに発展した。本は勝手に取ってはいけない。自分が渡す人である、と言う。あたると「当り」と大きな声をだして本を渡す。数人の友達と三十分位、機嫌よくやっていた。それからマジックで紙に例の地図を書いていたが、あっという間に積木に、「ありがとうございます。50円」と書いてしまう。クレンザーをつけて雑巾で拭いて

いると、友達が一人ずつふえてきてハンカチをだして拭きだした。人が増えてくると、「ケラケラ」と笑い喜ぶ。「マジックは消えなくてお友達が困っているでしょう」と言うと、「消えると思ったよ」と言う。お弁当は、冷える食器に入っているところ天に青海苔をかけ、小さいビニールを口であけおつゆをかけておいしそうに食べる。ピアノに写る友達を見ていたが、なんとなく淋しそうなので、「お家に帰る?」と聞くと、「お母さんが来ないから」と言うので電話をかけてお迎えにきて貰う。二時間半いたが、二時間がいいところだろう。ビュティフルネームの歌をうたっていたとき、「切手を送るネパールのお友達も幸せになるように、K夫ちゃんもお弁当が食べられて、みんなと遊べるようになるといいわね」と言ったら、駆けてきて、ぬいだブラウスで怒って私をたたいた。はじめてのことであった。細い腕に怒りと力がこもっていた。なんということを言ってしまったのだろう。「その子の成長を助ける」などと言いながら傷つけ、傲慢にも甚しい。あさましくも教育しようなどと大それたことを考えていたに違いない。これは欲深い驕りであり、許されないことだ。ごめんなさい。許して欲しい。反省しきりなり。

六月二十七日

登園すると同時に他の組へ行って切手を持ってくる。「数えて」というので、「十五枚よ」というと、「あと一枚で十六枚だね」という。マジックで絵を描いているので、「これなあに」と聞くと、「きかないで」と言う。また、余計な質問をしてしまった。抱っこすると、赤ちゃんのようにぺったりとくっついて頬ずりをする。部屋で本のゲームのつづきをしてから、「にわとりと水」の本を読む。一対一だと落ちついて行動できる。ゆっくりした気持の大人と、物のない静かな場所だったらやさしい表情になるような気がする。

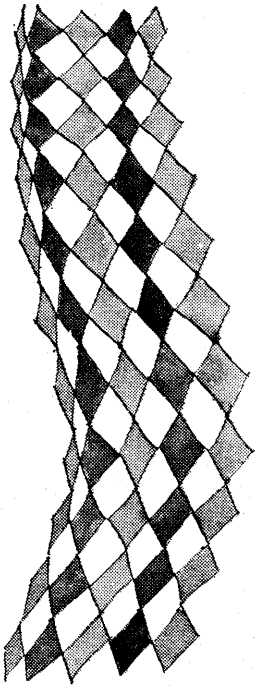
（つづく）

（神奈川・市ヶ尾幼稚園）

若いお母さんたちへ

幼稚園探しをめぐって

はるにれの会　榎田二三子



秋になり、お子さんの幼稚園を決められた方も多いと思います。我家の長女Aも、来年から二年保育で幼稚園へ入れることにしました。今までも地域の共同保育や大学の研究会へ参加していましたから、集団に入れることは、初めてではないわけです。ところが、親の私は、何か不安でしかたがありません。今までは集団に参加はしていても、泣けばすぐ聞こえる位の距離でした。幼稚園は、一日に何時間も親から見えない所にいるわけです。

友だちにいじめられて泣いても親の所へ来るわけにはいかないし、子どもはいったいどうするのだろうかとか、友だちと仲良く遊べるかしらとか、危ないことをやってないかしら、けがでもしなければいいけどとか、親の手の届かない所へ行かせる不安が次々にわいてきます。まるで風船の手を離す瞬間のような気持ちです。風船のように空高く上り、けっしてもどってこないわけではないのに。

この不安を少しでも少なくしたいと思い、安心してまかせられる幼稚園を探すことにしました。我家は八階建て、百三十九戸のマンション。一棟に同じ学年の子どもが十数人います。ですから、夏が終り秋になると、先輩お母さん、後輩お母さんが入り混じり、幼稚園についての井戸端会議が始まりました。そこでは、お母さんたちのいろいろな意見が聞かれました。私が思ったことも加えながら、御紹介しましょう。

○親も幼稚園に行くことが多いし、下の子がいたら、近くて送迎バスがあるのが何よりよというお母さん（雨の日や下の子が熱をだすことだってあるし、やっぱり近いのがいいかしら。）

○帰ってきても遊べるように、友だちが行っている所がいいわよというお母さん　（遊ぶ友だちがいなかったら淋しいでしょうね。でも今まで遊んでいたのだから、どうにかならないかしら。）

○子どもが、ここがいいというからと幼稚園を決めたお母さん　（子どもの言いなりでいいのかしら。親が幼稚園を決めるべきでないのかしら。）

○運動会の鼓笛隊を見にいらっしゃいよ。素晴らしくて、自分の子どもがやっているのを見ると涙が出ちゃうわよというお母さん　（幼稚園の子で鼓笛をできるのが、そんなに素晴らしいことかしら。やりたくない子はどうするの。他の大切なものを忘れちゃってんじゃないのかしら。）

○字や数を教えてくれるし、お話の読みとりなんかやってくれるから家で教えなくていいし、いいわよというお母さん　（みんな一斉にすわらせて字や数を教えられ、

子どもは楽しいのかしら。犬の調教みたいな気がするけど。お話だって、子どもと一緒にあれこれ話しながら読むのがいいんじゃないのかな。)

○字や数を教えないし、わりと自由らしいわよというお母さん　(実際に見学すると、個人を大切にし、自由を認める姿勢は感じられるけど、時間割が決められていて、今日はみんなでこれをやりましょうという園)

お母さんたちの話を聞いたり、幼稚園に見学に行ってあれこれ迷いました。見学に行った多くの幼稚園で、次のことを指示されるまで、ぼけーっとしている子、何もしないですわっている子がいるのに驚き、こういう幼稚園には入れたくないと思って帰ってくるのでした。ただひとつの幼稚園だけ、そういう子がいないと思った幼稚園がありました。以前この幼稚園のパンフレットを読み、子どもの自己充実を大切にしてくれていると感じていた幼稚園でした。けれども、華々しい幼稚園を見て、この幼稚園を見ると、日常生活と何も変わらないこの幼稚園が、一時は非常に見おとりして感じられました。他の幼稚園では、飛び箱が飛べるようになるとか、楽器ができるようになるとか、眼に見えることが子どもたちの身につけられていました。やらせればできるようになるのに、やらせないというのは、それだけ遅れをとり損をするのではないかと思えてきたのです。やらせればできるようになるのなら、そういう幼稚園もそれなりにいいのではないかと迷いました。けれどもやらせるなのです。子どもがやるではないのです。大事なポイントを見過ごすところでした。

私が幼稚園を決めるのに、これだけはどうしてもと思っていたポイントがひとつありました。我家のAは、家でも公園でも原っぱでも、紙くず、アイスの棒、花びら、落ち葉、石ころ等々、何でもすぐ見つけ拾ってきて遊び始めます。一旦遊び始めると、どんどん楽しみ始めひたっています。そしてまた新しく遊びを広げていく、生活を楽しむ子だと思っています。このことを親の私は、素晴しいことだと思い、このよい面をつぶさずに、伸び伸びと遊べるような時間と空間が保証された幼稚園

というのが、私の幼稚園選びのポイントでした。この点をとるためには、通園方法や、幼稚園の見ばえのよい設備などは、どうでもよいことだと思っていたのです。Aのためには、やはり自己充実を大切にしてくれるこの幼稚園しかないと思い始めました。

ところで、Aが生活の中で、どのようにして幼稚園というものを知ったのか、少しお話しておきたいと思います。Aは一歳三ヶ月で現在のマンションに引越してきました。たまたま、隣に五ヶ月早い同学年の女の子（N）と、年子のお兄ちゃん（R）がいました。三人は、兄弟のように行き来し、遊んでいました。大好きな隣のRが、幼稚園へ行き始めると、AはNと一緒にお迎えに行きます。制服を着て黄色いカバンをさげ、通園バスから降りてくるRは、Aのあこがれでした。Aにとって幼稚園といえば、Rの行っている幼稚園だけだったのです。次の年に、NもバスでRの幼稚園へ行き始めました。

Aに、どこの幼稚園へ行くのと聞けば、隣の子たちの行っている「こひつじ」と答えが返ってくるようになっていたのです。私が行かせたい幼稚園と、Aの行きたい幼稚園が違うわけで、どうにかしてこれを統合しなければなりませんでした。とにかく、私が行かせたいひかり幼稚園へ、Aを連れて見学に行ったわけです。小雨降る園庭で遊具をひっぱりだして遊び、ホールでは大きな積木で何やら作り始め、部屋にとことこと入って行き、そのクラスの子たちがへんな顔でちょっと見ているのも気づかず、本物のジャーから粘土のごはんを本物のおちゃわんに入れ、楽しそうでした。家に帰って聞いてみました。

「きのうの幼稚園と今日の幼稚園とどっちが楽しかった。」

「今のとこ。」（ひかり幼稚園のこと）

「今日のとこバスがないのよ。電車で行くのよ。」

「アキやだ。こひつじに行く。」

数日後、

「ひかりはいいよ。楽しいよ。」

「でも、アキはこひつじに行くの。」

その後も、

「この間行って楽しかったでしょ。ひかりに行く？」

こんなやりとりが、しばらく続きました。あまり「こひつじ」と言っているので、ある日お風呂の中で、

「幼稚園を決めるのは、アキじゃないからね。お母さんが決めるからね。」

と言い放ってしまいました。Aは私に背を向け、ぶすーとして何も言いませんでした。このしばらく後、近所の人にどこの幼稚園に行くのと聞かれると、ぶすーとして、「ひかり。」と、いかにも不本意そうに答えるようになっていました。これを見て、いけない、いけない、この子の心の中はまた「かなしい」なんだと気づかされました。

またというのは、今年の三月にAの「かなしい」という心に出会っていたからでした。それは、こんなできごとでした。夜寝る前にいつもの通りふとんの中で本を読み始めました。雑誌の乗り物や食べ物が並んでいるページを読んでいた時です。

「Aは何がほしいですか。」

「自転車。Nちゃんみたいなピンクの自転車。」

「へえ。黄色だっていいじゃない。」

「だってNちゃんにかっこわるいって言われると、アキかなしいもん。」

「他の人にいろいろ言われて、まねるのはいやだな。自分がこれがいいと思ったら、頑張ればいいじゃない。」

「だっていやなんだもん。Nちゃんと同じピンクがいいの。」

この時は、いつもならほしいものと聞くと食べ物をあげるのに、そのページに出ていない自転車と言ったことにちょっと驚き、隣のNちゃんの持っているものをまた欲しがり始めたと思っただけでした。けれども、子どもたちが寝静まってひとりになると、Aの言った「かなしい」という言葉が私の心の中にずっしり重く残り、本当に悲しくなってくるのでした。どうして私がこんな気持ちになるのか考えてみました。すると、友だちと遊んでいる時のAの様子が浮んでくるのです。

二歳の頃、Nとうまくいかず、Aが遊びを見つけ遊び始めると、Nちゃんにとられる。Aがまた新しく遊び始めると、またとられる。そしてもめる。Aはすぐ泣く。泣くとまたやられる。そんなことを繰り返すうちに、とられても泣かずに次の遊びを見つけるようになったA。

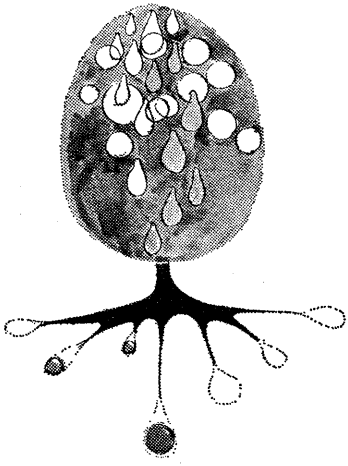
近所の仲よし四軒が集まって遊ぶと、「Aちゃんはだめ。」と言われてしめだされる。すると新しいことを見つけNちゃんに働きかけ、やがて入れてもらえる。けれども心の中は不発に終っているA。

いすを並べた電車ごっこで、「そこはだめ。」と言われると、それでも一緒にやりたいからだめと言われない隅の方にすわっているA。

おえかきをする時、紙をなかなかもらえなかったり、クレヨンも「ひとつだけね。」と言われ、机にも入れてもらえない。それでも一緒におえかきをしたいから、友だちのそばの床の隅でかいているA。

折り紙でアイスクリームを作ってみせると「へんなの。」と言われ、だまってしまうA。

はじかれたり、だめと言われたり、へんなのと言われたり、そんな中で黙々と自分なりにやっているAでした。自分の遊びをすることで、一応その場にはまる状況を作っていました。全体の動の中で、Aも動だったのですが、それは違う歯車であり、かみ合っていなかったのです。そこでのAの心は、「かなしい」だったのだろうと思いました。遊んでいるということで、私はAの心を



見過ごしていたのです。

今回も、私の気持ちの歯車と同じように回る歯車をAは作り、「ひかり」と答えることで一応母が満足いくような状況にしました。けれども、Aの心の中は「かなしい」のですから、歯車はかみ合っていないわけです。その上いかにも不服そうな仏頂面です。どうしたものかと思いました。ひかり幼稚園は遠いし、（我家から四十分かかります）友だちのたくさんいる幼稚園にしようかと、またまた迷いましたが、ひかり幼稚園がいかに楽しいか話すことにしました。ケーキを作ったり、ざりがにを採ったり、いちごつみをしたりするんだってと、Aの好きそうな楽しいことをたくさん話しました。そして、足繁く、幼稚園へ連れて行って遊ばせ、Aの気持ちを心の底から湧き上らせることにしたのです。ちょうど、幼稚園の行事があったので、それに参加することにしました。運動会では乳幼児のプログラムに出て園児の作ったケーキをもらい、バザーでは、お菓子を食べたり、買いものをしたり、お母さんたちの作ったシーツの宇宙船で遊んだりと楽しいことがたくさんありました。けれども何よりの決定打は、バザーのくじ引きで、欲しくて欲しくてしかたがなかったおもちゃのお金が何十コも入ったおさいふが当ったことでした。「これ、ひかりのバザーでもらったんだよね。」と言って友だちに見せています。ひかり幼稚園の楽しさが急速にAの心の中に入りこみ、「かなしい」はもうどこかへ飛んでいってしまったのでした。Aの行きたいと思う幼稚園と、私が行かせたいと思う幼稚園が、やっと一致しました。私の思う幼稚園へAを引っ張りこんだのではなくて、A自身の心がこの幼稚園を選んだように思え、うれしくなってくるのです。

Aが生まれて四年目の幼稚園探しでした。我家の場合は、Aにはっきりした希望があったことで、いったいこの子にはどんな幼稚園がよくて、どんな生活を作っていったらいいのか考えさせられました。要は、何をとり、何かを捨てるという決定をすればいいのだと思っていました。我家の場合は、気に入った幼稚園へ行くために通うたいへんさがあり、近所の友だちと遊べなくなるかも

知れないということでしたが、欲張って頑張ってみるとどうにかなるものです。友だちとどこかで接点を見つけようと気をつければ、子どもの世界は自然に広がっていきました。その下地作りをしているところです。こんな風に親が頑張り始めると、またAの希望が表われ、考えさせられることになるのでしょうが。

今日、幼稚園からの入園許可書が届きました。届いた許可書を台所で大声をだして読んでいますと、遊んでいたAが、

「えっ。えっ。」

とにこにこして言います。

「Aちゃん、ひかり幼稚園に来てください。待っていますだって。」

と言うと、

「わーい。わーい。うれしいな。」

と飛びまわっています。来年は、親子三人で幼稚園通いです。いったいどんな楽しいことが待っているのやら、Aだけでなく私も幼稚園に行く日が待ち遠しい気分です。

ところで、幼稚園探しを始める時に感じていた数々の不安は、よい幼稚園にめぐりあったからでしょうか、不思議なことにAの「かなしい」と一緒にどこかへ飛んでいったらしいのです。今では、いってらっしゃい風船ちゃん。幼稚園からもどってきたら、また楽しい話を聞かせてねと言って、何の不安もなく大空へAという風船を手離せるような気持ちになっているのです。

雑誌を編集する仕事に携わっていると、毎月必ず同じ作業がまわってきます。原稿依頼、原稿整理、入稿、校正、そしてまた校正。ですから、このスケジュールにあわせて、一月を分けるくせがつきます。一日のうちに正午や5時が占めるのと同じように、一月の中で、入稿の日、校正の日が大きな意味をもってきます。最初のうちは、うっかり忘れて相棒に怒られたり、「またか」とうんざりもしましたが、最近では、「この日が入稿だから、あの仕事をそれまでに片付けておこう」というように一つの区切りとして利用しています。

しかし、そのように一月を分けると、時の過ぎるのが早いこと。あっという間に次の月がまわってきます。これは、編集だけでなく連載をお持ちの先生方も同じような思いをしていらっしゃると思います。

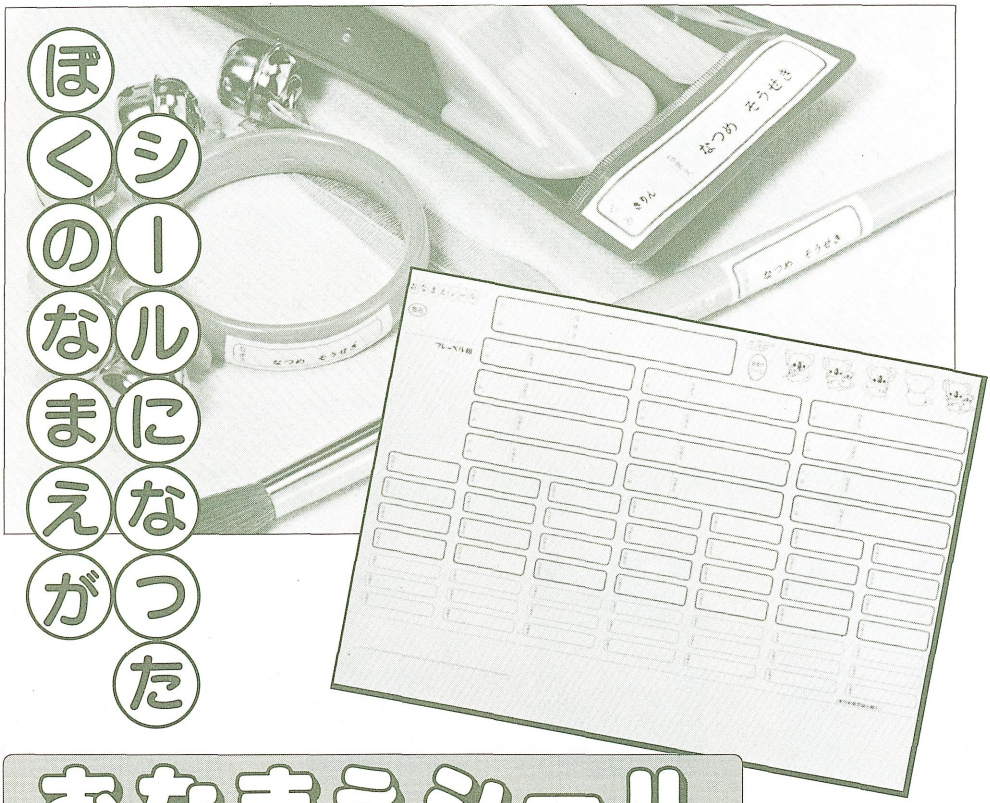
一年間、幼稚園からステキの話を届けて下さった大橋利恵子先生、ありがとうございました。この一年は短くお感じになったことと思います。

今月号から、冨田先生の演劇に関する連載が始まりました。ご期待下さい。

（真）

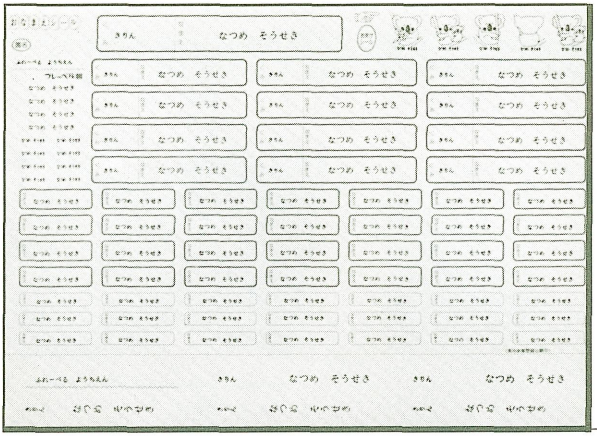
幼児の教育　第八十五巻　第二号
二月号　©　定価三五〇円
昭和六十一年一月二十五日　印刷
昭和六十一年二月一日　発行
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行人　本田和子
東京都港区三田五ノ一二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会
東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社
東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京九―一九六四〇番

◉本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします
＊万一製造不良の点がございましたら，おとりかえいたします。



おなまえシール

280円



フレーベル館のおなまえシールは、園児の名前をコンピューターにデータとしてインプットし、タックシールに打ち出してお届けします。ですから、一つ一つの持ち物に手書きで名前を入れる手間が省けます。もちろん、水にぬれても名前が消える心配がありません。
クレヨン、マーカーなど個人用持ち物、傘立て、ロッカーなど備品に手で名前を書き込む煩雑さを解消させる新製品です。

材質：タックシール
シールサイズ：7種類、合計84シール

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

61年度8大月刊誌

子どもの世界 いきいき わくわく
キンダーブックのラインアップ

子どもの目　いきいき
子どもの心　わくわく
優れた絵本との出会いは
新しい心の芽ばえを育てます

子どもの心と明日を考える
フレーベル館の保育絵本シリーズ
ゆたかな保育をお手伝いする　**キンダーブック**
園児の成長に合わせてお選びください

ゆたかな情操と創造する心を大切にする絵本

キンダーブック①〈情操〉

★A4ワイド判/36頁
付録「紙工作」特別付録「ウサギさんのミニブック」「生活シール」「こいのぼり」
団体購読価 280円

観察する目 考える心を育てる絵本

キンダーブック②〈観察〉

★A4ワイド判/40頁
付録「紙工作」
特別付録「ちえのわブック」「できたかな？シール」「こいのぼり」
団体購読価 280円

自然の不思議を感動的に伝える絵本

しぜん―キンダーブック③

★L判/32頁/上製本
特別付録「こいのぼり」
団体購読価 330円

夢いっぱい 読んで楽しい絵本

キンダーメルヘン

★L判/28頁/特別付録「こいのぼり」
団体購読価 250円

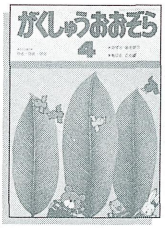
感動をよぶ すぐれた創作絵本

キンダーおはなしえほん

★L判/32頁/上製本/特別付録「こいのぼり」
団体購読価 330円

幼児の学習意欲を生みだす絵本

がくしゅうおおぞら



★A4変形判/36頁/別冊付録「おかあさんのほん」特別付録「あいうえお表」「こいのぼり」団体購読価 300円

スキンシップを楽しむ絵本

ころころえほん

★AB判/20頁/特別付録「こいのぼり」
団体購読価 250円

これからの時代の子どもを育てる保育雑誌

保育専科

★B5判/本誌・別冊付録「指導計画と指導の実際」とも定価400円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館